

大学教育開発センター

年報

第2号

2010年3月

Contents

活動の記録

- 第3回 桜美林大学大学教育開発センター学内シンポジウム
キャリア支援教育を考える
- 第4回 桜美林大学大学教育開発センター学内シンポジウム
科目内容と成績評価のあり方の関係を考える
- 第3回 桜美林大学大学教育開発センター公開研究会
名古屋大学における教育・学習支援教材の開発に学ぶ
- 第4回 桜美林大学大学教育開発センター公開研究会
カナダにおけるカリキュラム開発研究に学ぶ

図書紹介

資料編

- 2009年度 大学教育開発センター活動報告
- 桜美林大学 大学教育開発センター スタッフ一覧
- FD・SD関係文献目録(2009)

は し が き

1年目（2008年度）の大学教育開発センターのメイン事業は、センター内の三部門の活動を通してFD・SDの捉え方と課題の提示をすることであり、その上で桜美林大学の現状調査の実施を通して全学的な教育改善に向けて現状把握と問題点の整理に積極的支援、つまり牽引役を果たすことであった。これらの活動に対して、学内からは一定の評価を頂けたと思いたい。そして、2年目の活動を **taking off**（離陸年）と勝手に位置づけていたことから、センターの活動も佐藤東洋士センター長から初年度に、授業改善に関するFDを「どのような授業をするのか」から「どのように教育していくのか」、つまり専門分野について「何を教えなければならないか」「到達目標を設定して、実現のための協力関係・体制を構築」への戦略的転換が必要であるとの示唆を受けていたことから、更なる全学的な教育改善、教育職員だけではなく、事務職員にも具体的な業務展開への協力体制の一步を踏み出すことができたと思っているが、学内の関係各位からの評価はいかかなものだろうか。

2009年4月にセンター全体会議を開催し、2008年度（設立初年度）の業務活動を可能な限り精査し、次に2009年度の展開計画の確認作業からスタートした。5月、6月で各部門会議を開き、実施計画を立てる作業に入ったが、全研究員は兼任ということから献身的な努力以外に期待することはできない事情を考慮しつつ、新規の事業設立には慎重にならざるを得なかったことは否定できない。しかしながら、シンポジウムも公開研究会の内容も既述のような戦略的、更には具体的内容に多少なりと転換を図ることができたと言い切るのは我田引水過ぎるかもしれないが、ある程度確認できるのではないだろうか。

先ず、FD・SD部門からは、Newsletter No.2（7月発行）で **Teaching Tips** を解説し、No.3（1月発行）では新大学認証評価について解説している。特筆すべきは、両号で「授業実践の現場から」と題して、専門分野での共通課題を提示されている。第3回学内シンポジウム「キャリア支援教育を考える」と題して、キャリア開発センター部長からCADACの活動からの課題を整理して、全学的な視点からの検討の重要性と方法を具体的に提示された。更に外部講師からは統計的な分析から桜美林の新生の特徴と課題を具体的な数字の提示があり、FD・SD活動に大きな示唆を与えられた。第4回学内シンポジウム「科目内容と成績評価のあり方の関係を考える」は、学士力の向上、つまり学士課程の質保証、さらには厳格な成績評価の共通課題への具体的な問題提起となった。圧巻は本学において教育改善活動の中心的な存在である2名の教育職員、しかも、文系と理系のそれぞれの専門分野から討論の機会があったことである。

次に調査・研究開発部門では、第3回公開研究会「名古屋大学における教育・学習支援教材の開発に学ぶ」と題して、近い将来センターが支援体制に入るであろう **Teaching Tips**、と **Learning Tips** の開発段階から教育実践における可能性と限界について活発な質疑応答があり、今後の事業展開に示唆に富む内容であった。また、当センターの研究員の一人が

事務職員として、研究会への感想を寄せている。

第4回公開研究会「カナダにおけるカリキュラム開発研究に学ぶ」と題して、カナダの大学教員から学士課程教育における Learning Portfolio の学士力向上と質保証と具体的なカリキュラム開発について研鑽を積む機会を与えられたことは幸いであった。

最後に情報評価・分析（IR）部門は、本学データブック（桜美林大学 Fact Book 2009）作成、そして、第三者から認証評価を受けるための準備として、自己点検・評価報告書作成のために「桜美林大学自己点検・評価企画委員会」と「自己点検・評価委員会」の立ち上げとスケジュールの大枠作成に全面協力を行った。Fact Book 2008 は学内の教職員に説得力のある数字を提示したことで、予想以上の反響であった。特に成績評価の実態把握から喫緊の検討課題として全学的に問題意識を喚起することができたことは大きな収穫であった。『桜美林 Fact Book 2009』は、昨年度同様に年報とは別の冊子体で刊行を予定している。学内の各部署から貴重なデータの提供をして下さった各位に感謝申し上げます。

上記の三部門による主要活動の他に創刊号と同様に年度活動報告、センター研究員一覧、そして参考になる 2009 年 FD・SD 関係文献目録（論文編と単行書編）を掲載している。第2号から図書紹介を掲載することになり、本号は2名の調査・研究開発部門研究員から FD に関する本が2冊紹介されている。是非一読願えれば幸いである。

最後に、今年度初頭の Taking Off という共通意識のもとで、少し欲張った計画を立てたが成果として残せなかった項目も多々ある。しかしながら、シンポジウムや研究会の内容を見る限り、質的な向上は達成できたのでは自負しているが、実際の評価は学内の教職員からの評価こそ重要である。そこで、教育職員と事務職員各位から忌憚のないご意見を頂けるシステムを構築したい。ここに、当該センター年報第2号を刊行できたことは、センター研究員各位の献身的な努力と学内教職員のご協力とご支援の賜物である。センター次長として御礼申し上げるとともに3年目である2010年度のセンター事業にご参加頂けますようお願い申し上げます次第である。

大学教育開発センター次長 武村 秀雄

目 次

はしがき	i
大学教育開発センター 次長／大学院 大学アドミニストレーション研究科 教授 武村 秀雄	

目 次	iii
-----	-----

活動の記録

第3回 桜美林大学大学教育開発センター学内シンポジウム	1
キャリア支援教育を考える	
【発表1】 キャリア支援教育を考える 一日常業務の事例を通して	3
キャリア開発センター 部長 志村 望	
【発表2】 「自己発見レポート」から見たキャリア教育の課題	7
株式会社ベネッセコーポレーション 大学支援事業開発部 影山 裕介	
第4回 桜美林大学大学教育開発センター学内シンポジウム	11
科目内容と成績評価のあり方の関係を考える	
【発表】 基礎理論科目の成績評価について	13
～「ミクロ経済学」での経験から～ 大学教育開発センターFD・SD 部門研究員／リベラルアーツ学群 教授 堀 潔	
【指定討論者コメント1】	17
リベラルアーツ学群人文学系 教授 坂井 昭宏	
【指定討論者コメント2】	20
リベラルアーツ学群自然科学系 教授 秀島 武敏	

第3回 桜美林大学大学教育開発センター公開研究会	21
名古屋大学における教育・学習支援教材の開発に学ぶ	
【発表】 名古屋大学における教育・学習支援教材の開発	22
名古屋大学高等教育センター 准教授 近田 政博	
研究会に参加して	28
大学教育開発センター調査・研究開発部門研究員／総務部人事課 係長 岩野 英隆	
第4回 桜美林大学大学教育開発センター公開研究会	29
カナダにおけるカリキュラム開発研究に学ぶ	
【発表】 カナダにおけるカリキュラム開発研究	30
The University of British Columbia 准教授 Harry Hubball	
図書紹介	
①近田政博『学びのティップスー大学で鍛える思考法』	33
(玉川大学出版部、2009年)	
大学教育開発センター調査・研究開発部門研究員／リベラルアーツ学群 教授 中島 吉弘	
②東北大学高等教育開発推進センター編『研究・教育のシナジーとFDの将来』	37
(東北大学出版会、2008年)	
大学教育開発センター調査・研究開発部門研究員／基盤教育院 専任講師 鳥井 康熙	
資料編	
1. 2009年度 大学教育開発センター 活動報告	41
2. 桜美林大学 大学教育開発センター スタッフ一覧	42
3. FD・SD 関係文献目録(2009)	43
大学教育開発センター 補助研究員 橋爪 孝夫	
編集後記	67
大学教育開発センター調査・研究開発部門 主任代理／基盤教育院 教授 井下 千以子	

【活動の記録】

第3回 桜美林大学大学教育開発センター 学内シンポジウム 1

キャリア支援教育を考える

第4回 桜美林大学大学教育開発センター 学内シンポジウム 11

科目内容と成績評価のあり方の関係を考える

第3回 桜美林大学大学教育開発センター 公開研究会 21

名古屋大学における教育・学習支援教材の開発に学ぶ

第4回 桜美林大学大学教育開発センター 公開研究会 29

カナダにおけるカリキュラム開発研究に学ぶ

第3回 桜美林大学 大学教育開発センター 学内シンポジウム

キャリア支援教育を考える

2009年12月7日(月) 17:00-19:00

於 桜美林大学 町田キャンパス 明々館 A204 教室

センター主催のFD・SD学内シンポジウムの第3弾として、「キャリア支援教育を考える」をテーマに、教職員全体としてキャリア開発支援力の養成を図る趣旨のシンポジウムが、2009年12月7日(月)17:00-19:00に、崇貞館A204教室にて実施されました。

本学キャリア開発センター部長の志村望氏から「目指すべきキャリア支援教育プログラムとは」、影山裕介氏(ベネッセコーポレーション 大学支援事業開発部)から「『自己発見レポート』結果からみたキャリア教育の課題」の課題提起があり、教職員22名の参加を得て活発な質疑応答、討論が行われました。また、会の後には、ファカルティ・クラブにおいて懇談会が持たれました。

プログラム

- | | |
|-------------|---|
| 17:00~17:05 | 開会
(司会) 館 昭 (FD・SD 部門主任、大学アドミニストレーション研究科 教授) |
| 17:05~17:50 | 「目指すべきキャリア支援教育プログラムとは」
志村 望 (キャリア開発センター 部長) |
| 17:50~18:30 | 「『自己発見レポート』結果からみたキャリア教育の課題」
影山 裕介 (ベネッセコーポレーション 大学支援事業開発部) |
| 18:30~19:00 | 質疑・討論 |

キャリア支援教育を考える －日常業務の事例を通して－

キャリア開発センター 部長
志村 望

1. 概要

- ①キャリア開発センター（以下 CADAC）紹介、大学と「キャリア」を取り巻く環境、「キャリア」の意味
- ②キャリアデザインプログラムとキャリアアドバイザー制度
- ③現在の就職環境、社会が学生に求める力
- ④CADAC の活動をとおして見えてきた課題
- ⑤CADAC が目指すキャリア支援

2. 報告内容

本学では、2006 年度から「キャリアデザインプログラム」および「キャリアアドバイザー制度」を導入した。他大学で、本学と同等規模のキャリアアドバイザーを配置した取り組みは例を見ない。

2006 年度以降、新体制の元でまず、CADAC のミッション・ビジョン・バリュー（以下、MVV）を策定し、この考え方に基づいて、組織体制、業務マネジメント体制などの整備を行った。CADAC ではそれまで行われてきた業務の見直しと、CADAC が主催する行事の再編を実施してきた。その取り組み中で、教員の協力を得て 2 年間連続して実施している 1 年次学生向けのアセスメントがある。この実施目的は、次の二点である。まず一点目は、「初年次のうちからできるだけ目的意識を持たせ、在学中における学生のキャリア形成力を向上させたい」ということ、二点目は、「実際にどのような学生が在学しているか実態を把握する」ということである。アセスメントの内容は、学生の社会的志向と基礎学力検査からなっている。このアセスメントを、毎年継続して実施することにより、学生の傾向について徐々にあきらかになってきた。この結果を踏まえ、CADAC では必要な新規事業を計画し、実施した。

その他、PDCA サイクルを回すために、諸行事实施後や学生との面談後には学生評価アンケートを行い、CADAC サービスの改善に結びつくようにしている。2009 年度は新たに卒業生への進路選択満足度調査、企業へは大学評価アンケートを実施し、卒業生も含め社会が本学をどのように評価しているのかを明らかにしたうえで、必要な施策を実施する予定である。

また、教学部門等との連携強化も重要と考え、定期的で開催されるキャリア開発委員会の他に、各学群教員との情報共有の場を設けるように努めている。

当センターが考えるキャリア支援は、CADAC の MVV にあるように、本学学生が自己肯定感を持ち、「本学の卒業生で良かった」といえる学生を排出することにある。また、進路選択およびそのプロセスの満足度を向上させることが CADAC の業務目標である。

今後、キャリア支援教育を考える上では、CADAC も含め全学的な視点から検討を行う必要があるが、当センターとしては、次の項目が課題と考える。

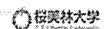
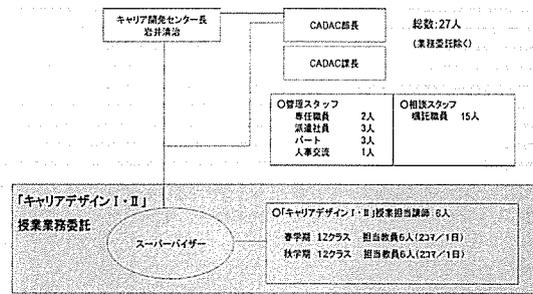
- ①学内のベクトルあわせ、②教学部門や他部署との連携、③学内リソースの活用、④キャリア教育体系化、⑤学生を巻き込んだ支援 －「教職」協働から「教職学」協働－

1. キャリア開発センターとは

- ◆ 2002年3月まで就職部→CADAC (通称)へ改組 (Career Development Assistance Center)
- ◆ 就職・進学・留学など学生の進路支援
 - ・ 学生が適職を見出せるような相談や指導
 - ・ 就職や進路選択に必要な各種情報の提供
 - ・ 就職ガイダンス、学内合同企業説明会、セミナー等の実施
 - ・ 就職・進学のための各種サポートプログラム策定と実施
 - ・ インターンシップやボランティアに関する各種情報の提供
- ◆ キャリアアドバイザー制度による個別相談体制



●組織体制

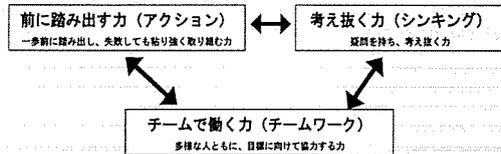


2. 「キャリア」を取り巻く状況

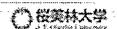
- ◆ 政策的要請
 - ・ 1999年中央教育審議会 接続答申
 - ・ * 学校と社会および学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育 (望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育)を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。 【背景にはニート・フリーター問題】
- ◆ 入学者確保の必要性
 - ・ 気になる就職率
 - ・ 就職機会の確保



- ◆ 企業側の要請 ー社会が求める3つの力ー 社会人基礎力



- ◆ 動けない学生への対応 社会環境などの変化、学生の変化



3. これまでの取り組み

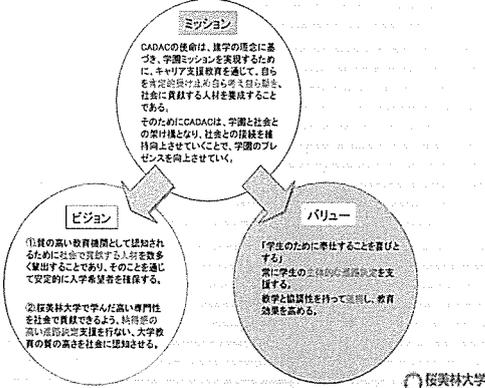
- ◆ CADACのMVVづくり
 - ◆ 桜美林学園のMVVビジョン
 - ー 質の高い教育機関として認知される
 - ー 財政基盤の安定と効率的な運営体制構築
 - 大学としてのAction Plan: 「良い教育を行う大学」
 - ー 本質的な教育改革の実現: UniversityとしてPower UP
 - ・ 本格的なりベラルアーツ (College)
 - ・ プロフェッショナル (School)
 - ー 専門職大学院を含む大学院の充実
 - ー 教養豊かな国際人の育成 (建学の精神の追求)



- ◆ 本学教育目標 (理念) 2004年9月
 - ・ どのような学生を育てたいのか: Obirin Origin
 - ー 問題解決能力: 物事を多角的な観点から論理的に洞察し、課題を解決できる力
 - ー 判断力: 異なる分野の知識に裏付けられた判断力
 - ー 創造力: 多くの情報から独自のものを構成し、作り出す能力
 - ー リーダーシップ: 知識と実行力を備えた人材
 - ・ 表現力: 自分の考えを正しく他者に伝えられる力
 - ー 広い視野とことば: 国際社会におけるコミュニケーション能力
 - ・ どのような分野に進ませたいのか
 - ー 多様な分野でのリーダー
 - ー 実社会の中堅として活躍
 - ー 大学院等でさらに研鑽



◆CADACのミッション、ビジョン、バリュー



●CDPとキャリアアドバイザー制度(2006年度から)

- ◆内定率(就職率)の向上
 - 届出率の改善を図り、全国平均以上へ
 - 参考 届出率 88.7%(06年度卒)→98.3%(07年度卒)→99.2%(08年度卒)
 - 就職率 69.7%(06年度卒)→79.7%(07年度卒)→81.5%(08年度卒)
- ◆指導体制の強化による学生満足度の向上
 - 学科間の指導格差をなくし、全員へ個別指導できる体制へ
- ◆各種セミナーを体系化し学生の意欲喚起
 - 学生参加率の高いセミナーへ統廃合し、就職意欲を喚起
- ◆キャリアデザインプログラムとキャリアアドバイザー制度
 - 2009年「キャリアデザインⅠ・Ⅱ」履修率
 - 春学期:957人(46%) 秋学期:1,198人(58%)

参考:現在のキャリアアドバイザー業務

- ◆人員配置
16人体制(現在欠員1のため実員15人)
- ◆担当学生
3年次秋学期より担当、1アドバイザーあたり、約240人担当
- ◆業務目標
①学生のCADAC利用を促進、②学生の進路掌握100%、③就職意欲の喚起と内定率向上、④学生満足度向上、⑤新規企業開拓
- ◆業務担当制(4班編成)
15人を4班にわけ、「各学群担当」、「企画、行事、企業開拓、留学生」各担当、近畿県別企業開拓担当などを割り振り
- ◆相談業務品質向上のための取り組み
①日本キャリアカウンセリング協会による専門研修
- 講義、同席面談、スーパーバイジング、スーパービジョンなど
②学生アンケートによる業務品質のチェック

●学生、卒業生を巻き込んだ支援

- ・学生就活団体の育成→桜サポーター
- ・内定者や卒業生生活用
- 教育組織や他部署との連携
 - ・学群長やキャリア開発委員との情報共有・連携
キャリア開発委員会、学群からの要望の吸い上げ
 - ・CADAC情報の開示と提供
 - ・他部署との連携・学内リソースの活用
例:国際交流センター、学生相談室など

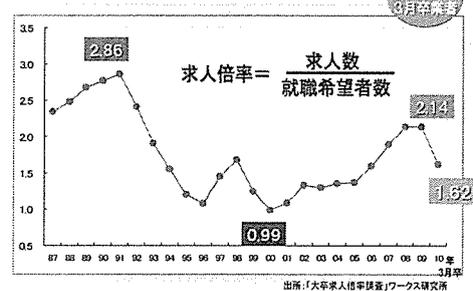
「教・職」協働から「教・職・学」協働へのシフト

●課題把握

- ◆低学年学生向けアセスメント
「自己プログレステスト」の結果から見てきたもの
⇒ SPI対策、グローバル企業開拓、キャリア教育体系化の必要性
- ◆行事毎のアンケート実施 PDからPDCAサイクル
学生の期待するものは何か ⇒ 新規のプログラムに反映
- ◆相談業務品質向上に向けた学生評価アンケートの実施
- ◆公務員対策、資格系就職開拓などの強化
- ◆学内他部署との連携・学内リソース活用
⇒ 「SPI対策にもなる算数の学び」芳沢光雄教授、学生相談室、
「大学院進学説明会」(大学院部長)、「国際舞台で働くこと」(CIS)など
- ◆外国人留学生や指導困難学生への対応

4. 現在の就職環境と社会が求める人材

●新卒の求人倍率



「自己発見レポート」から見たキャリア教育の課題

株式会社ベネッセコーポレーション 大学支援事業開発部

影山 裕介

ベネッセコーポレーションの「自己発見レポート」というアセスメント（基礎学力・社会的強み・進路意識・入学理由）の結果について、全国傾向・大学の傾向を押さえた上で、キャリア教育の課題を報告。また、昨今の就職環境の整理やキャリア教育の事例を紹介。

1. 2009年度全国新入生の特徴と課題

アセスメントから見た全国新入生の特徴として、「従順なツアー客」というキーワードを提示。過去の学生と比較して、「協調性」「共感力」の平均値が上がっている一方、「説得力」「創造的態度」の平均値が下がっている。また、全国的に高校から大学への進路選択の基準も曖昧になっており、大学への学びに対する早期の動機づけが必要となる。

2. 2009年度桜美林大学新入生の特徴と課題

基盤教育科目、「自己実現とキャリアデザイン」内で実施している「自己発見レポート」結果を元に、2009年度桜美林大学新入生の特徴を報告。

基礎学力では判断推理分野に課題があり、就職活動の筆記試験で課されることの多い「非言語分野」の育成が必要となる。社会的強みでは、「自主性」「共感力」「国際性」が全国と比較して高いスコアとなっており、桜美林大学の特徴と言える。進路意識については、リベラルアーツという学群特性もあり、「職業内容」理解のスコアが相対的に低く、希望進路や学びの目標をより具体化することが必要と言える。

3. 【参考】新卒就職環境の変化とキャリア事例のご紹介

変化の激しい新卒就職環境についてポイントを整理した上で、昨今のキャリア支援における「低学年化」「実利優先」「個別対応」という3つのキーワードを提示。低学年時から体系的にキャリア教育を実践し、社会的強みをベースに効果検証を行っている大学や、「自己認識力」を上げるための取り組みを事例報告として紹介。

結びとして、いわゆる「最近の学生」への接し方を紹介。特に、「最初は枠を示さないと学生が動けない」ということを強調。

「自己発見レポート」結果からみたキャリア教育の課題

- ①2009年度 全国新入生の特徴と課題
- ②2009年度 桜美林大学新入生の特徴と課題
- ③【参考資料】 新卒就職環境の変化とキャリア事例のご紹介



株式会社ベネッセコーポレーション
大学支援事業開発部
影山 裕介



1 ベネッセコーポレーションの学校事業

Benesse®

- 高校**
- 受験指導
 - 学習指導
 - 進路指導
 - 英語指導
 - 進研模試
 - 実力診断テスト
 - 基礎力診断テスト
 - スタディーサポート
 - 適性検査
 - 進路ノート
 - GTEC

約4,000校、延べ715万人
の高校生がアセスメントを受検

2008年度実績 / 学力検査のみ / 一貫校中学生含む

大学

- 初年次教育
- リメディアル教育
- 導入教育
- キャリア教育
- 自己発見レポート (入学生の1割が受検)
- リメディアル教材
- プレアセスメントテスト
- 基礎ゼミノート
- 教育的マッチング
- キャリア講座・ノート

270校、約20万人
の大学生がアセスメントを受検

2008年度実績 / 適正検査、一般常識テスト

ベネッセは、全国の高校生・大学生の学力 / 学習状況 / 進路意識などの情報を多数蓄積しています

2 ご報告データとして使用するアセスメントのご紹介

Benesse®

「自己発見レポート」



2008年度受検者数
73,340名(短大含む) / 107大学
※1997年度から13年間で約**55万人**
以上が受検

集計項目	集計内容	集団のセグメント・対比方法
■ 進路への意識	総合、自己理解度、進路条件、働くことの意味、職業内容理解、学ぶ意味	男女別・学部学科別、 入試区分別(*), 全国比較、過年度比較
■ 性格の傾向	内向<>外向、行動<>熟慮、堅固<>柔軟、8種のタイプ分類による分布	
■ 問題解決のスタイル	論理<>直感、熟考<>試行、4種のタイプ分類による分布	
■ 基礎学力	英語運用、日本語理解、判断推理、全国偏差値、段階値での度数分布	
■ 社会的強み	3領域、18項目の社会的強み	
■ 職業興味	10種の職業分野	

注) (*) 入試区分別は、基礎学力、進路への意識、社会的強みのみの集計となります。

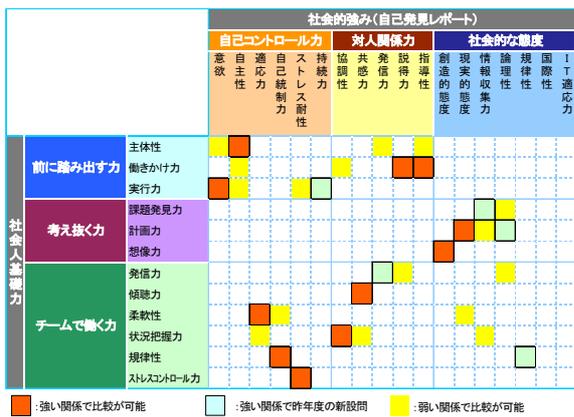
3 「社会的強み」の測定項目

Benesse®

分類	要素	内容
自己コントロール力	意欲	目標を高く掲げ、ものに積極的に取り組む
	自主性	人に左右されず、自分の考えで行動できる
	適応力	新たな環境に適応し、対処できる
	自己統制力	自分の行動や感情をコントロールできる
	ストレス耐性	精神的、肉体的に厳しい条件に耐えられる
対人関係力	持続力	当初の目的に対して、最後まであきらめない
	協調性	互いに協力して問題を解決しようとする
	共感性	人の考えや気持ちを理解し、受け入れることができる
	発信力	自分の意見を上手に発信することができる
	説得力	人を説得することができる
社会的な態度	指導性	人をまとめることができる
	創造的態度	新しいものや方法を生み出すことができる
	現実的態度	実現可能な範囲で、最も効果的な方法を実行することができる
	情報収集力	必要な情報を収集、分析できる
	論理性	筋道を立てて考えることができる
規律性	社会のルール、人との約束を守ることができる	
国際性	国際的な関心が高い	
IT適応力	情報の収集・加工・伝達等をパソコンを駆使して対処できる	

4 「社会的強み」と「社会人基礎力」の関係

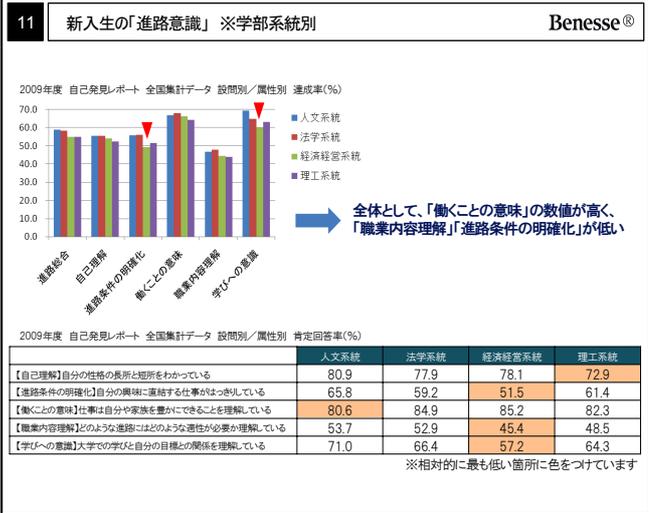
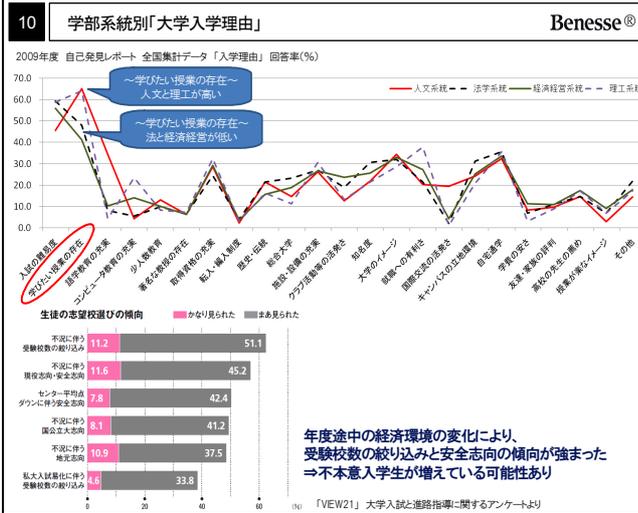
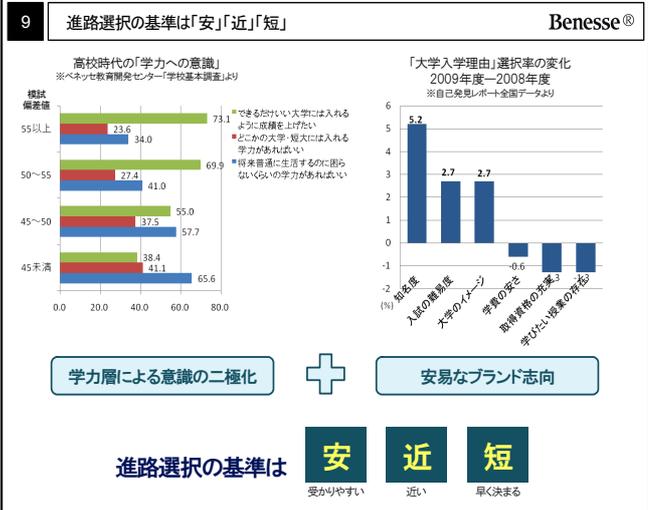
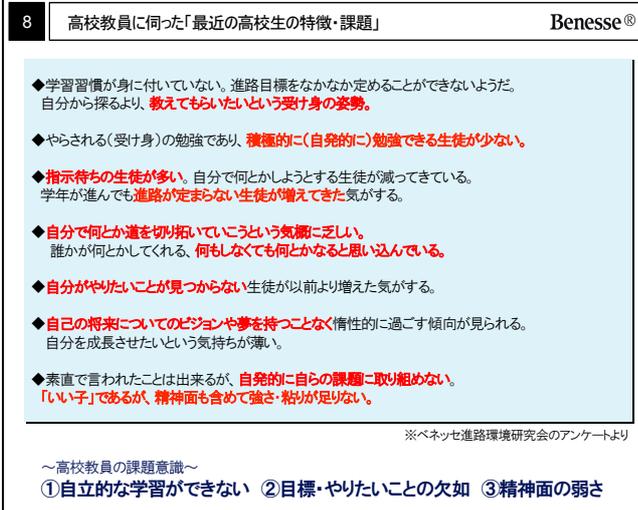
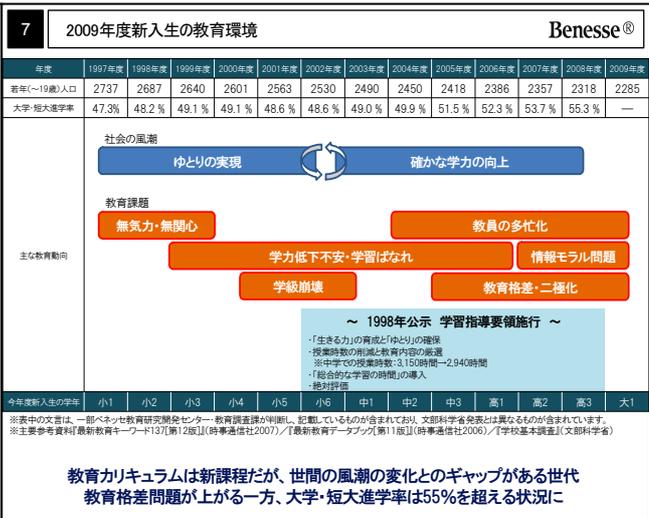
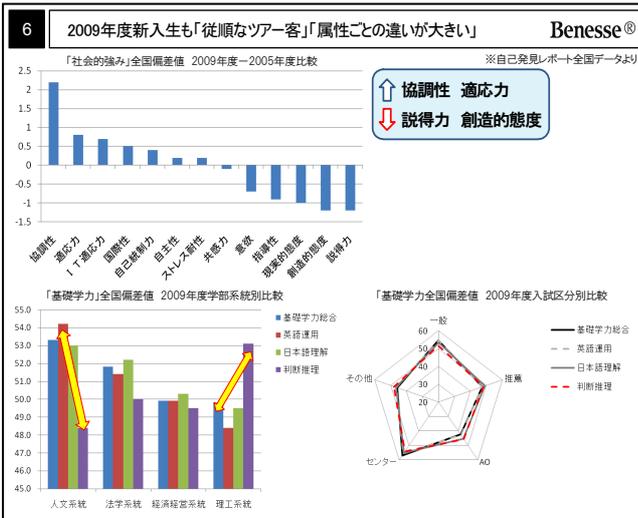
Benesse®



5 2009年度 全国新入生の特徴

Benesse®

2009年度 全国新入生の特徴



<p>12 Benesse®</p> <p style="text-align: center;">2009年度 桜美林大学新入生の特徴</p>	<p>13 Benesse®</p> <p>受験人数</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>【09春学期】今回受験</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th>学群(学部)</th> <th>受験人数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>383名</td> </tr> <tr> <td>リベラルアーツ学群</td> <td>108名</td> </tr> <tr> <td>ビジネスマネジメント学群</td> <td>247名</td> </tr> <tr> <td>健康福祉学群</td> <td>23名</td> </tr> <tr> <td>総合文化学群</td> <td>3名</td> </tr> <tr> <td>経済学部</td> <td>1名</td> </tr> <tr> <td>文学部</td> <td>1名</td> </tr> </tbody> </table> </div> <div style="width: 45%;"> <p>履修者が対象のため、今回の資料については下記の対応をしています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●全体 …… 国際・文・経済学部の学生を含む ●学群ごと …… 学群在籍者の集計(1年生以外も含みます) </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 20px;"> <div style="width: 45%;"> <p>【08春学期】比較対象①</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th>学群(学部)</th> <th>受験人数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>289名</td> </tr> <tr> <td>リベラルアーツ学群</td> <td>200名</td> </tr> <tr> <td>ビジネスマネジメント学群</td> <td>71名</td> </tr> <tr> <td>健康福祉学群</td> <td>4名</td> </tr> <tr> <td>総合文化学群</td> <td>6名</td> </tr> <tr> <td>経済学部</td> <td>4名</td> </tr> <tr> <td>文学部</td> <td>1名</td> </tr> <tr> <td>国際学部</td> <td>1名</td> </tr> </tbody> </table> </div> <div style="width: 45%;"> <p>【08秋学期】比較対象②</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th>学群(学部)</th> <th>受験人数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全体</td> <td>474名</td> </tr> <tr> <td>リベラルアーツ学群</td> <td>320名</td> </tr> <tr> <td>ビジネスマネジメント学群</td> <td>109名</td> </tr> <tr> <td>健康福祉学群</td> <td>6名</td> </tr> <tr> <td>総合文化学群</td> <td>31名</td> </tr> <tr> <td>経済学部</td> <td>3名</td> </tr> <tr> <td>文学部</td> <td>5名</td> </tr> <tr> <td>国際学部</td> <td>0名</td> </tr> </tbody> </table> </div> </div>	学群(学部)	受験人数	全体	383名	リベラルアーツ学群	108名	ビジネスマネジメント学群	247名	健康福祉学群	23名	総合文化学群	3名	経済学部	1名	文学部	1名	学群(学部)	受験人数	全体	289名	リベラルアーツ学群	200名	ビジネスマネジメント学群	71名	健康福祉学群	4名	総合文化学群	6名	経済学部	4名	文学部	1名	国際学部	1名	学群(学部)	受験人数	全体	474名	リベラルアーツ学群	320名	ビジネスマネジメント学群	109名	健康福祉学群	6名	総合文化学群	31名	経済学部	3名	文学部	5名	国際学部	0名
学群(学部)	受験人数																																																				
全体	383名																																																				
リベラルアーツ学群	108名																																																				
ビジネスマネジメント学群	247名																																																				
健康福祉学群	23名																																																				
総合文化学群	3名																																																				
経済学部	1名																																																				
文学部	1名																																																				
学群(学部)	受験人数																																																				
全体	289名																																																				
リベラルアーツ学群	200名																																																				
ビジネスマネジメント学群	71名																																																				
健康福祉学群	4名																																																				
総合文化学群	6名																																																				
経済学部	4名																																																				
文学部	1名																																																				
国際学部	1名																																																				
学群(学部)	受験人数																																																				
全体	474名																																																				
リベラルアーツ学群	320名																																																				
ビジネスマネジメント学群	109名																																																				
健康福祉学群	6名																																																				
総合文化学群	31名																																																				
経済学部	3名																																																				
文学部	5名																																																				
国際学部	0名																																																				
<p>14 Benesse®</p> <p>「自己発見レポート」結果から見る桜美林大学新入生の特徴</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>～基礎学力～</p> <ul style="list-style-type: none"> □基礎学力は判断推理分野に課題がある。 □特に、数と式／図形問題を苦手としている学生が多そう。 □昨年度新入生との差で見ると、英語運用が少し下がっている。 <p>～社会的強み～</p> <ul style="list-style-type: none"> □全国と比較すると、「自主性」「共感性」「国際性」が高い結果。 □昨年度と比較して低い項目は「自主性」「協調性」「共感性」。 □相対的な伸びしろは「自己統制力」(入試区分による違いがある)、「情報収集力」(学力による違いがあり、特に考えをまとめる力に特徴がみられる。) <p>～進路意識～</p> <ul style="list-style-type: none"> □自己理解の率は全国平均と比較して高い。 □反面、職業内容理解の数値が低く(全国と同じ傾向)、目標の「具体化」が必要。特に一般合格者／高学力層にその傾向がみられる。 </div>	<p>15 Benesse®</p> <p style="text-align: center;">～参考資料～ 新卒就職環境の変化 キャリア教育事例</p>																																																				
<p>16 Benesse®</p> <p>大学におけるキャリア支援・就職支援の最近の動き</p> <div style="margin-top: 10px;"> <p>低学年化 (ここ4～5年の動き)</p> <p>3年生になってからでは遅い。入学生の気質も変化している中で、低学年時から意識を高めて、大学で学ぶ目的・就職活動で活かせるスキルを習得させる。</p> </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>実利優先 (ここ1～2年の動き)</p> <p>筆記試験のための基礎学力、面接突破のためのマナー講座など、就職活動における実利を求めるコンテンツを用意する。</p> </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>個別対応 (ここ1～2年の動き)</p> <p>カウンセラーを設置・増員する大学が増えている。ガイダンス形式と共に、個別相談で就職支援を行う。</p> </div>	<p>17 Benesse®</p> <p>「最近の学生」への接し方 ～ベネッセ講師研修資料より～</p> <ol style="list-style-type: none"> ①手本を示せば外さない <ul style="list-style-type: none"> - 期待や間違っていることはきちんと言葉に。 - 枠を決めてやり方を示せば、まず、はずすことはない。 ②一度信頼を勝ち取る <ul style="list-style-type: none"> - 職場を彼らのコミュニティにする。「味方である」という認識を持たせれば、コミュニケーションは図れる。 ③押し付けない 巻き込む <ul style="list-style-type: none"> - 目標は押し付けではなく、ヒトコト。部門の目標決めのステップから、彼らを巻き込みヒトコトを回避、納得させる手間を。 ④小さなことから経験する機会をたくさん作る <ul style="list-style-type: none"> - 彼らが育ってきた環境と実社会のギャップは大きい。少しずつギャップを埋めていく経験を準備する。 - 彼らが比較的得意な、IT活用の情報処理力を活用し、比較検討資料など、できることからやらせてみる。 ⑤失敗を評価する <ul style="list-style-type: none"> - 自分で動く機会を与えられていなかったことから、失敗を恐れる。評価の基準が明確になれば、安心して動く。 																																																				

第4回 桜美林大学 大学教育開発センター FD・SD 学内シンポジウム

科目内容と成績評価のあり方の関係を考える

2009年12月7日(月) 17:00-19:00

於 桜美林大学 町田キャンパス 明々館 A204 教室

第4回大学教育開発センターFD・SD学内シンポジウムが、2010年1月26日(火)16:30-18:00、明々館A204教室を会場におこなわれました。今回は、センターのNewsletter第2号に「授業実践の現場から」シリーズの第1回目として「基礎理論科目の成績評価について～「ミクロ経済学」での経験から～」をご執筆いただきました堀 潔先生に、科目内容に応じた成績評価のあり方について、改めて問題提起をいただき、この課題を深める機会としました。

指定討論者として、坂井昭宏先生(人文学系/リベラルアーツ学群教授)と秀島武敏先生(自然科学系/リベラルアーツ学群教授)をお迎えし、活発な質疑応答、討論が行われました。また、会の後には、ファカルティ・クラブにおいて懇談会が持たれ、引き続き活発な意見交換が行われました。

プログラム

- | | |
|-------------|---|
| 16:30～16:35 | 開会
(司会) 館 昭 (FD・SD 部門主任、大学アドミニストレーション研究科 教授) |
| 16:35～17:00 | 話題提供：堀 潔 (経済・経営学系/リベラルアーツ学群 教授) |
| 17:00～17:10 | 指定討論者コメント：坂井 昭宏 (人文学系/リベラルアーツ学群 教授) |
| 17:10～17:20 | 指定討論者コメント：秀島 武敏 (自然科学系/リベラルアーツ学群 教授) |
| 17:20～18:00 | 質疑・討論 |

基礎理論科目の成績評価について ～「ミクロ経済学」での経験から～

大学教育開発センターFD・SD 部門研究員／リベラルアーツ学群 教授
堀 潔

筆者は1994年度に本学経済学部に着任以来、「ミクロ経済学」という科目を担当してきた。基礎理論の解説であるが故に内容が抽象的であり、また多少の数学的思考が必要とされるため、学生諸君にとっては「なかなか好きになれない」科目のひとつである。しかしながら経済学教育全体からみれば、「ミクロ経済学」は基礎理論だからこそ応用範囲も広く、学生にはそれ相当の意欲を持ってとりくんでもらわなければ困る科目でもある【スライド4～5】。

上記を考慮し、「ミクロ経済学」の成績評価に際してはあえて「出席状況」をまったく無視し、試験の結果だけで成績を評価してきた。評価は①授業時間内に行われる4回の中間試験（各25点満点）と②試験期間内に行われる最終試験（50点満点）の合計点で評価することとし、③合計点が90点以上の学生をA、80点台をB、70点台をC、60点台をD、59点以下をFで不合格とした【スライド6～10】。

この成績評価方法で15年間毎年同じことをやり続けてきたが、10年ほど前から困った現象が現れ始めた。学期中に4回行う中間試験のとくに初回で成績の悪かった学生のモチベーションが一気に下がってしまい、以後の講義への出席者数が減少したり、講義の雰囲気沈滞してしまったのである【スライド11～15】。そこで5年ほど前から「中間試験の追試験」を実施し、自らの成績が不本意だと考える学生に対して再チャレンジの機会を与えることにした。「追試験」実施以降、高得点の学生は増えている。また、授業で使用したスライドを授業後でも見直すことのできるように、moodle (Obirin e-Learning) にスライドをアップして学生の復習に役立てるようにした。そのせいかどうかはわからないが、授業に真剣にとりくむ学生が多くなってきたようにも感じる【スライド16～17】。

成績評価の基準は学生のモチベーションに大きな影響を与える。「ミクロ経済学」の場合は、経済学の基礎理論科目であるという性格上、すべての履修者がある程度内容を理解する必要があるため、努力して合格ラインに到達した学生にはその達成度に応じた評価を与えている。場合によっては、すべての履修者がAとなる可能性もある。それが果たしてよいことかどうかは議論の分かれるところであろうが、低学年対象の基礎理論科目に関しては、私はそれでもいいのではないかと（いまは）思っている【スライド18】。

基礎理論科目の成績評価について ～「ミクロ経済学」での経験から～

堀 潔 (経済・経営学系:リベラルアーツ学群)
2010.01.26 大学教育開発センター FD/SD学内シンポジウム

堀 潔(ほり・きよし)

- 1994年から桜美林大学に勤務。
- 専門分野: 中小企業経営・中小企業政策
- 担当科目:
 - 産業組織論
 - **ミクロ経済学**
 - 中小企業論
 - リベラルアーツセミナー
 - 専攻演習 I～IV
 - 専攻入門(ビジネスエコノミクス・総合政策)★
 - 学外研修事前学習★
 - インターンシップ I～IV ★
 - 学外研修事後学習★
 - 学際・統合科学基礎(自分の未来を考えよう)★

2

きょうのおはなし

- 「ミクロ経済学」って、なに？
- 「ミクロ経済学」の成績評価方法
- 疑問に感じたことと改善したこと
- 成績評価について、思うこと

3

「ミクロ経済学」の特徴(1)

- 個々の経済主体の動きに着目する
 - 消費者、企業などの「経済合理的」行動の分析
 - 市場における価格・取引量の決定メカニズム
 - 市場における不確実性、限定合理性等のもとでの消費者、企業などの行動の変化
- 科目としての「ミクロ経済学」
 - 内容が抽象的。言葉が難しい。
 - 多少の数学的思考が必要とされる
 - 学生にとっては「なかなか好きになれない」科目のひとつ

4

「ミクロ経済学」の特徴(2)

- キャリア形成のために必要な「ミクロ経済学」
 - 公務員試験の科目(経済原論)
 - 公認会計士、中小企業診断士、FPなど
 - 経済学検定試験(NPO法人日本経済学教育協会)
- 「ミクロ経済学」は基礎理論だからこそ応用範囲も広く、学生にはそれ相当の意欲を持ってとりくんでもらわなければ困る科目

5

成績評価の方法

- 授業時間内に行われる4回の**中間試験**(各25点満点)と最終回に行われる**最終試験**(50点満点)の合計点によって評価する。
- 得点と評価の関係は以下のとおり。
 - A・・・90点以上
 - B・・・80～89点
 - C・・・70～79点
 - D・・・60～69点
 - F・・・59点以下(不合格)

6

成績評価の方法

- 中間試験の結果は、原則として試験日から7～10日以内に、公表される。
- 各中間試験が20点未満の者に対して、「追試験」を実施する。受験するかしないかは任意だが、追試験の成績が本試験を上回れば、追試験の成績を本試験の成績に代える。
- 4回の中間試験のうち、2回を欠席した者には単位を与えない。原則として欠席理由は問わない。

7

使用するテキスト



- 『ミクロ経済学〔第2版〕』
- 著者名：伊藤元重
- 出版社：日本評論社
- 価格： 3,150円

現在、出版されている初級ミクロ経済学のテキストの中で最も平易に書かれていて、必要な内容がすべて網羅されている。

8

副読本：よりよい理解のために



- 『ミクロ経済学パーフェクトマスター』
- 伊藤元重・下井直毅
- 出版社：日本評論社
- 価格： 1,995円

図書館に「指定図書」として配架してあります。

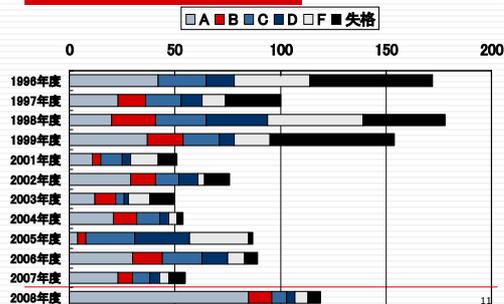
10

なぜ、この成績評価の方法にしたか？

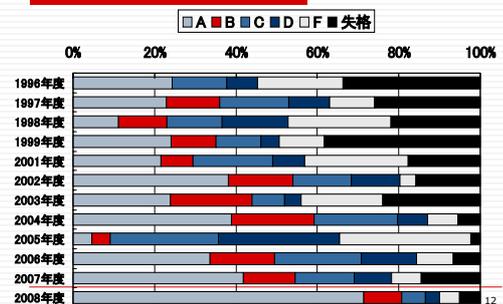
- 「基礎理論科目」だから
- 内容を理解してもらわなければ困るから
 - 内容を理解できるのであれば、勉強方法は問わないことにしよう
 - 出席状況は無視しよう
- 科目の運営が簡単だから
 - テストの結果だけ見ればよい
 - 履修者が多数になっても大丈夫だろう

10

成績評価の推移（学生数）



成績評価の推移（成績評価別構成比）



疑問を感じたところ(困ったこと)

- 失格者の多さ(1996~99)
 - 第1回目の中間試験の成績が悪いと、やる気がなくなってしまう。
 - 第1回目の中間試験が10点未満の学生の約6割が単位をとれない。

13

第1回中間試験成績と最終成績(1996)

	優	良	可	不可	失格	計
15+	24	5	1	2		32
10-14	13	11	3	12	5	44
-9	5	6	8	15	15	49
欠席		1	1	7	38	47
計	42	23	13	36	58	172

14

疑問を感じたところ(困ったこと)

- 失格者の多さ(1996~99)
 - 第1回目の中間試験の成績が悪いと、やる気がなくなってしまう。
 - 第1回目の中間試験が10点未満の学生の約6割が単位をとれない。
- 履修者数の減少(2001~05)
 - 基礎学力の低下(とくに数的処理能力)
 - 出席者数の減少
 - 同僚からのアドバイス

15

改善点(1):「追試験」の導入

- 2006年度から段階的に
- 20点満点。本試験よりも高い点数が取れたら、追試験の得点を本試験と置き換えてあげる。
- e-Campusの「課題提出」機能を利用し、学生に問題配布。学生は問題用紙を印刷して解答を書き込み、教室へ持参する。
- 2007年度:48名が受験し、うち36名が成績を改善した。2008年度:52名→41名。2009年度:39名→26名

17

その他の改善点:

- 「見やすさ」の追求(2007年度~)
 - 「黒板に手書き」から「スクリーンにスライド」へ
 - 学生には、「ノートに手書き」を強要
- 授業の復習や自習のススメ(2009年度)
 - Obirin e-Learning (moodle)を利用して、授業で利用したスライドや練習問題プリントなどを掲出

2008年度、A+Bで80%超!
(2009年度も同じくらいの見込み)

18

成績評価について、思うこと

- 学生が勉強したくなるような成績評価を。
- 「ミクロ経済学」は基礎理論科目なので、すべての履修者が内容を一定程度理解する必要がある。
 - だから、努力して合格ラインに到達した学生にはその達成度に応じた評価が与えられていい。
 - 場合によっては、すべての履修者がAとなる可能性もあっていいのではないか。

19

「科目内容と成績評価のあり方を考える」指定討論者コメント1

リベラルアーツ学群人文学系 教授

坂井 昭宏

1. 堀潔教授の積年の授業改善のご努力に心からの敬意を表明する

桜美林大学の学生の学力は多様であり、あまり出来のよくない学生の学力を向上させるには相当の努力と覚悟が必要だからです。

また、出席を取るか取らないかというのは、ある程度は教員の好みの問題です。私も前任校まではいっさい出席は取りませんでした。しかし、桜美林大学に着任してからは丹念に出席を取るように努力しています。「講義日数の1/3以上欠席した学生には単位を認定しない」という本学の規定には、十分に合理的な根拠があるように思います。

2. 成績評価は経営問題でもある

原則として、「ミクロ経済学」「倫理学概論」等の専門体系的諸科学の中核的な授業科目については、日本全国どの大学で基本的には同一の教育内容を持つべきであり、また成績評価も同一の規準で行われるべきであろう。このことは、各種の国家試験に直結する学問諸領域を考えるなら自明である。堀さんのこのお考えには全面的に賛成です。私は倫理学ですから国家試験は関係がありません。でも、各大学院修士課程の入学試験があります。大学院進学を志望する学生が各地の大学院の過去問を取り寄せて調べていますが、どこの大学院でもだいたい同じような出題方式を採用しています。大きな論述問題が一つ二つと基本的用語の説明が10問程度というスタイルです。

ですから、倫理学概論ではそういうレベルで授業を進めています。試験（レポート）は3回程度ですが、修士課程入試の論述問題のようなレポートや、小問題と同じような基本的用語の説明を20題ほど出しています。こういうやり方で本格的に授業を進めると、当然のことですが、LA学群では少なからず不合格者が出ます。はっきり言えば、各授業科目についてどの程度まで不合格者を出してよいのか、学群毎のある程度の合意が必要でしょう。

私はこういうところで大学としての見識が問われているのだとも考えています。成績評価問題は経営問題だと書いたのは、おそらく4年間で1年次入学者数の一定数が脱落してゆくと、それだけ授業料収入が減るからで、大学経営に影響を及ぼさざるをえない。ですから、そのことを見込んで年間予算を立てて下さいと言うことです。不合格者を何パーセントまで許容するかという合意が成り立っているなら、成績評価に関する細かな工夫は不必要になります。

3. 成績評価はカリキュラム開発の問題でもある

各学問分野によって授業科目の配列の仕方は違うのですが、たとえば、倫理学概論の履修条件（先修科目の指定等）が明確になされているなら、言い換えれば、受講学生の側に一定の予備知識（と当該授業科目の履修に関する動機付け）があるなら、受講学生にそれほどの能力のばらつきは見られないであろう。また、学習意欲の低い（やる気のない）学生に不合格という評価を与えることにもそれほど問題はないでしょう。こういう条件が本学ですでに出来上がっているなら、堀さんのようなご苦勞はしなくても済んだのではないのでしょうか。はっきり言うと、各教員にそういう（授業内容ではなく、授業方法の改善の）工夫をさせていることに、もっと怒りを感じるべきだと思います。個々の教員が毎日の授業のなかで苦勞をしなければならない理由の一端は、カリキュラムがきちっとしていないことにあります。

4. 授業開発の一環としての成績評価への疑念

堀さんは「第1回目の中間試験の成績が悪いと、やる気がなくなってしまう。」「努力して合格ラインに到達した学生にはその達成度に応じた評価が与えられてよい」という意見です。これには、多少の疑問を感じます。目的と手段を取り違えているように思われるからです。たしかに、学生の学習意欲を高めるための工夫は、毎日の授業のなかでやらないといけないことです。でも、もう少し学習習慣が身につけている学生であれば、比較的速やかに解決のできる問題だとも思われます。私としては、学生の動機づけに関しては LA 学群なら LA セミナーなどを通して、入学後の早い時期に対処しておくべき問題だと思います。

私は毎回出席を取っているので、全部出席した学生にはワンランク評価を上げています。一日も休まずに出席するような学生は、それなりに熱心に授業を聞いているので、出席がよい学生に不可を付けるということはまずない。結果として、出席だけで合格の認定をするということは起こらないのです。ただし、A（秀）はそれほど多くを出しません。

5. 個人的実践—進度を気にせずに何度でも同じことを教える

私は学生が授業内容を面白いと思うまで、基礎的なところを繰り返し執拗に教えています。昨年度の経済学部倫理学概論の学生のなかに、非常に受講態度の悪い学生が数人いました。授業には休まずに出て来ているのですが、成績がよくない。授業中はおしゃべりをしている。これは困りました。学生の出来具合を見ながら授業を進めるので、シバラス通りには行きません。まず講義で一通り教えて、試験問題で取り上げて、もう一度その解説をやる。私はしつこい。「私が面白いと思っているのだから、君たちも面白いと思いなさい」という調子です。それを学期の2/3ほど続けて、最後の1/3はシバラスに書いていない教材を使ってレポートを書かせました。しかも、それを2回繰り返した。

その2回目のレポートの時に一人、一番身体がでかくて柄の悪い学生が「レポートって、

「どうやって書くのですか」と聞きに来ました。私は「勝った」と思いました。やっとこちらが伝えたいことを理解してくれた、と。経済学部学生ですから、倫理学の専門的な知識をどの程度まで修得するかよりも、どれだけ勉強する気になってくれるかが重要です。少しでも勉強することの面白さを理解して欲しい。これが課題です。哲学とか倫理学は、今の学生にはそれほど馴染みやすい学問ではないからです。

「科目内容と成績評価のあり方を考える」指定討論者コメント2

リベラルアーツ学群自然科学系 教授

秀島 武敏

ここでは主に自然系の立場からコメントさせていただく。

1. 自然系科目について

- ・積み重ねの学問である。
- ・休むと前との繋がりおよび全体の様子がわからなくなる。
- ・数学が基礎、物理→化学→生物学、地学となるほど応用性が強くなる。
- ・気象学、天文学、地震学などの科目は応用的な学問であり数学、物理などの知識が必要であるが、そういうことがわからずに受講し挫折する学生が多くいる。
- ・化学は最初に周期表の話から始める。そのためには量子論から始めなければならない。物理では量子論は2、3年生で始める。したがって化学は難しい。

2. 学生の問題点

- ・高校時代基礎の数学を習ってきていない。数学I及びAまでの学生がほとんど。物理や化学で必要な微積分がわかっていない。
- ・理科も1科目か理科総合しか習っていない。
- ・高校時代に受けた科目を受ける傾向にあり、新しい科目にチャレンジする気持ちが少ない。
- ・勉強の習慣が身につけていない、ノートの取り方がわからない（講義を熱心に聞いているが実際試験をやってみると全然わかっていない）

3. 教科内容

- ・内容を下げて講義（中学、高校の内容から説明、教員によっては小学校の内容から復習）
- ・自然科学基礎の講義では数式をなるべく使わない。（数式が増える毎に授業評価が下がる）

4. 成績評価（絶対評価か相対評価か）

- ・前の大学に比べ基準点を下げ、絶対評価をしている。（具体的には試験問題をやさしくしている）
- ・Aの割合は1～2割。
- ・出席をとっているが、レポート提出と組合せて評価の対象にしている。

最後に

文系の学生に対する理系の基礎教育と同様に理系の学生に対する文系の教養教育のほうも検討して欲しい。

第3回 桜美林大学 大学教育開発センター 調査・研究開発部門 公開研究会

名古屋大学における教育・学習支援教材の開発に学ぶ

2009年12月22日(火) 11:00-12:10

於 桜美林大学 町田キャンパス 崇貞館 E教室

大学教育開発センター調査・研究開発部門主催、第3回公開研究会が、2009年12月22日(火)、町田キャンパス 崇貞館 E教室においてをおこなわれました。

今回は、名古屋大学高等教育研究センター准教授の近田政博先生をお招きし、「名古屋大学における教育・学習支援教材の開発に学ぶ」と題して、ティーチング・ティップスの開発に始まり、ラーニング・ティップスへの展開までをお話いただきました。

まず、午前の部は公開研究会として、『成長するティップス』や『新入生のためのスタディティップス』の開発の理念から実施に至るまでのプロセスと、開発型アプローチの可能性と限界についてご講演いただきました。そのあと、ご紹介いただいた豊富な教育実践に則して、具体的で活発な質疑応答がおこなわれました。

次に、午後の部では部門内勉強会として、開発の手法や学内での普及活動についてお話を伺うことができました。これまでの名大での取り組みを具に伺い、調査・研究開発部門としても大変貴重な勉強の機会となりました。

プログラム

- | | |
|-------------|---|
| 11:00～11:05 | 開会
(司会) 井下 千以子 (研究開発部門、基盤教育院 教授) |
| 11:05～11:55 | 「名古屋大学における教育・学習支援教材の開発」
近田 政博 先生 (名古屋大学高等教育センター 准教授) |
| 11:55～12:10 | 質疑・討論 |

名古屋大学における 教育・学習支援教材の開発

近田 政博
(名古屋大学高等教育研究センター)
2009.12.22 桜美林大学 大学教育開発センター

自己紹介

- 近田 政博(ちかだ まさひろ)
- 高等教育研究センター・准教授
 - 教育発達科学研究科の高等教育学講座を兼任
- 博士(教育学、2003年、名古屋大学)
- 専攻 高等教育学、比較教育学
- 著作
 - 『学びのティップス 大学で鍛える思考法』(単著、2009年)
 - 『ベトナム2005年教育法』(越日訳、2009年)
 - 『研究指導を成功させる方法』(英日訳、2008年)
 - 『近代ベトナム高等教育の政策史』(単著、2005年)
 - 『成長するティップス先生 授業デザインのための秘訣集』(戸田山和久らとの共著、2001年)

本日のあらすじ

- なぜティーチングティップス？
- 『成長するティップス先生』のつくり方
- 『ティップス先生』開発から得られたもの
- 名大高等教育研究センターの制作物と実践
- 「開発型アプローチ」の可能性と課題

名古屋大学高等教育研究センター

Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University

- 1998(平成10)年4月設立
- 常勤:センター長(兼任)、教授1、准教授2、助教1
- 非常勤:研究員2、事務補佐員2、研究補佐員4
- 客員:外国人客員1(実質2人)、国内客員1(実質3人)
- ミッション
 - 国際的な視野のもとに、高等教育機関の戦略的課題の解決に貢献する
- 学内の位置づけ
 - 学内共同利用施設の一つ(珍しい独立型)
 - 他学部・研究科、教養教育院、学生相談総合センターなどとは並置の関係
 - 大学院教育発達科学研究科の高等教育学講座を兼任
- 運営費:年1500万円前後(常勤・非常勤の人件費含まず)
+ 科研費、GP、コンソーシアムなどの外部資金

歴代センター長

全学の協議会において、2年ごとに学内の教授から選ばれる

- 初代 馬越 徹(比較教育学)1998.4-2000.3
- 2代 梶田正巳(学習心理学)2000.4-2000.11
- 3代 山田弘明(西洋哲学)2001.1-2002.12
- 4代 黒田光太郎(材料工学)2003.1-2004.12
- 5代 戸田山和久(哲学)2005.1-2008.12
- 6代 木俣元一(西洋美術史)2009.1-

なぜティーチングティップスから 始めようと考えたのか？

- 「広島大学 大学教育研究センター」を意識
 - 後発センターの悩み→では「後発効果」をねらうしかない
- 「広島型研究」に足りないところを探す
 - 教育社会学的アプローチの課題は？
 - 馬越徹初代センター長(平成10~11年度)の存在
- なぜ名古屋大学でティーチングティップスが必要か
- 大学の教育現場で困っている問題は何か
 - シラバスの書き方、大人数講義、成績評価など山積
- 名古屋大学に眠っているリソースは？
 - 共通教育の方針・事例集などが事務書棚の肥やしに

アカデミックな高等教育研究が扱うテーマ

- 大学教授職
- 歴史
- 思想
- 制度
- 政策
- 財政

→大学単位の話ではなく、**一国単位あるいは国際的な高等教育政策を扱う**

7

実践型の高等教育学が扱うテーマ

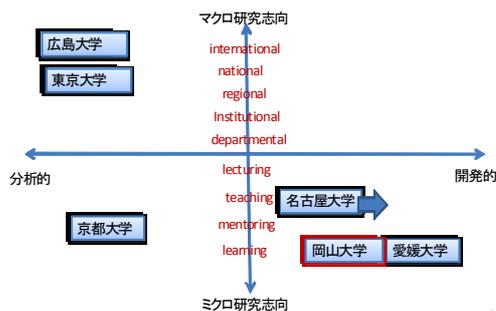
- FD(教授法、授業設計、成績評価など)
- 教養教育
- 初年次教育
- 大学評価
- 学生による授業評価
- ICTの活用
- カリキュラム
- 組織マネジメント
- 大学院教育・研究指導

→目的は、**現実課題の改善・改革に寄与すること**

8

研究の対象規模による類型化

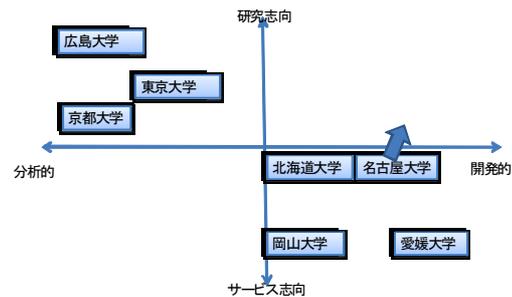
macro-micro axis



9

研究の志向性による類型化

research-service axis



10

ティーチングティップスとは？

- 授業のコツやポイントをまとめたもの
- たとえば、
 - 教科書を選ぶときのポイント
 - 初回の授業に何をするか
 - 毎日の教材作成の手間を省くには
 - 大人数の講義でディスカッションをするには
 - 成績評価の基準をどうするか

11

「ティップス先生」の全体構成

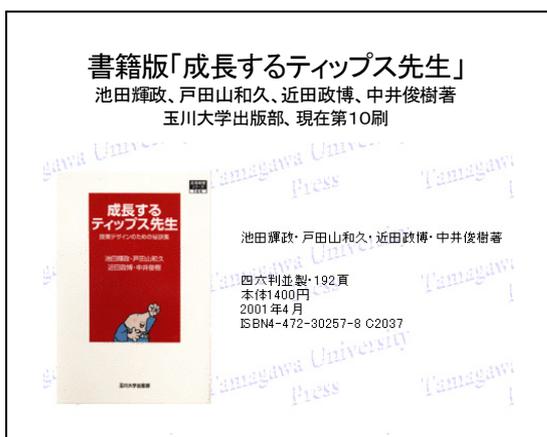
- 玄関(趣旨、使い方、目次)
- 「ティップス先生」の授業日誌
- 授業の基本
- 困ったときに(Index, FAQ)
- 情報への窓口(参考文献、リンク)
- みんなの広場(電子掲示板)

12



「授業の基本」の構成

- 1: コースをデザインする
- 2: 授業が始まるまでに
- 3: 第一回目の授業
- 4: 日々の授業をデザインする
- 5: 魅力ある授業を演出する
- 6: 学生を授業に巻き込む
- 7: 授業時間外の学習を促す
- 8: 成績を評価する
- 9: 自己診断から授業改善へ
- 10: 学生の多様性に対する配慮



オンライン版と書籍版の比較

<ul style="list-style-type: none"> オンライン版 (2000.03) 名古屋大学教員 ローカル情報 必要な所をつまみ食い 内部のリンク 外部へのリンク ファイルのダウンロード 	<ul style="list-style-type: none"> 書籍版 (2001.04) 全国の大学教員 一般情報 全体を通して読むということを想定 機能は限定したが、コンテンツを充実化
---	--

オンライン版への辛口意見

- 授業のマニュアル化につながるのではない
- どのように教えるかよりも、「学生がどのように学んだらよいか」という視点が弱いのではない
- カタカナ語が多すぎる。日本語化できないか
- 実現困難なティップスがある
同僚の授業をみせてもらう、など

1998年当時の名大センターの弱点

ないない尽くしからのスタート。あるのは若さと意欲だけ。

- スタッフが若すぎて教育経験はほとんどない (近田講師30歳、中井助手28歳: 当時)
- 名古屋大学での教育経験が豊富だったのは戸田山助教授のみ (40歳: 当時)
- 池田教授の着任が1年遅れた (50歳: 当時)
- プレハブの2階に間借り、設備は皆無
- 学内の人脈は馬越、戸田山頼み

制作の手順



開発のコンセプト

- 名古屋大学版
 - 対象を特定化することで、きめ細かく情報提供
- 気楽に読める
 - 架空の教師の授業日誌: おもしろさも必要
 - できるだけ専門用語を減らす
- 成長する
 - 改訂を続ける(現在ver1.2, 2004年末改訂)
 - 多様な学生への対応、成人学習、IT活用に関する本文追加、各種コラムの追加、学内教職員へのサポート情報などを追加、外部リンクのアップデート

20

コンテンツの基本方針

- 理念より実践を重視
 - 授業のあとで少し教室に残ってみよう
 - 学生のレポートは本人の手元にもコピーを保存させよう
 - テストやレポート結果を早めにフィードバックしよう
- ローカル情報を入れる
 - 各種報告書の蓄積を活かせ
 - 名古屋大学方言(基礎セミナー)
 - 学内のガイドライン(不正行為に対するルール) 学内施設の内線番号

21

オンライン化をめざす

- 関連する部分をハイパーテキスト化して、相互にリンクを貼ることができる
- 電子掲示板を設けることにより、読者の反応を知ることができる
- コンテンツの随時更新が可能
- 学内外の関連情報へのリンクが可能

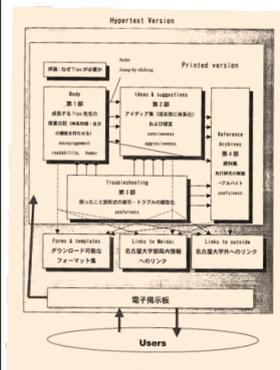
22

ベンチマークを探す

- Benchmark(達成基準、目標基準)
 - 日本にはほとんど存在しなかった。
- アメリカの総合大学に多くの蓄積がある
 - *Mckeachie's Teaching Tips: Strategies, Research and Theory for College and University Teachers* (1999)
 - 『授業をどうする! カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』(1995)
 - *The Chicago Handbook for Teachers: A Practical Guide to the College Classroom* (1999)
 - *Teaching at Stanford: An Introductory Handbook for Faculty, Academic Staff and Teaching Assistants* (1998)

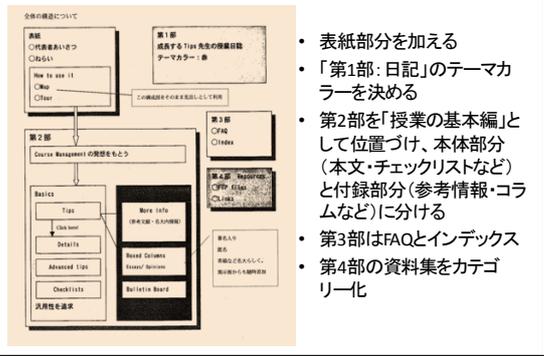
23

『ティップス先生』の概念図(1999年9月6日)

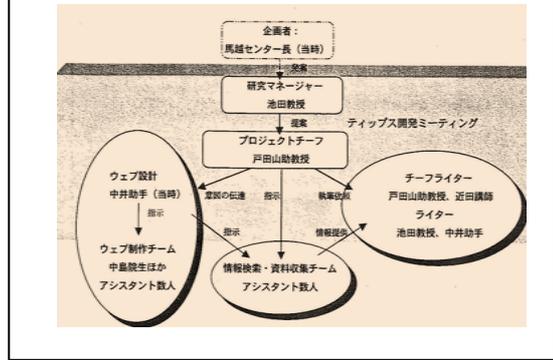


- オンライン用と書籍用の違いを明示
- 「第1部: 授業日誌」を時系列で制作する
- 「第2部: アイデア集」は、preparation, presentation, evaluationの3要素で構成
- 「第3部: トラブルシューティング」と「第4部: 資料集」では重要項目を相互リンクさせる

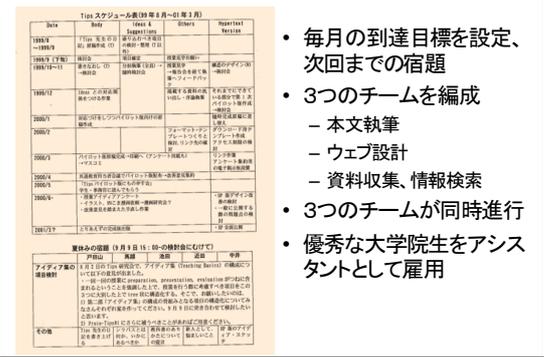
『ティップス先生』の概念図(2000年1月17日)



制作上の役割分担



制作スケジュール



開発型アプローチをめざして『ティップス先生』開発から得られたもの

- 教育・学習現場の状況やニーズを把握し、これに基づいた支援教材を開発し、実際の研修で活用・改訂を行う。これらのプロセスを通して支援教材の適用可能性と課題を明らかにする研究手法
- 欧米の大学では教育・学習センターが中心となり、実践研究が広く普及している
- 現場の教育・学習改善を主目的とする点で、政策研究、調査研究とは異なる。みなさんのお役に立ちたい
- 開発の過程で見えてくるものに注目する
- 「ものづくり」で日本一になりたい

開発型アプローチによる研究活動

- 学内の教職員・学生の経験・事例を収集する
- 国際的に通用性の高いモデル、アプローチに基づいて、学内事例を活用しながらFD教材を制作する
- ベンチマーク対象を定める
- 制作物をFDなどの場で活用する
- 制作物を学内教職員・学生に配布する
- 制作物をすべてウェブ上に公開する
- 制作物について学内外でモニターを依頼し、その結果を改訂に活用する
- 開発プロセスや開発物について、学会発表や論文化する

『ティップス先生からの7つの提案』

教員編2005, 学生編2005, 大学編2005, IT活用授業編2006, 教務学生事務職員編2007, (大学院生編 2010.3リリース予定)
ハンドブック版は約35,000部

さらに『ティップス先生からの7つの提案』が4冊

この4冊は、各在籍大学の学生・教員・職員がより良い情報を提供するための提案(具体的にはFD)をまとめたものです。

各編とも、さまざまな観点から教育活動の改善を促しています。本センターは、各編の活用を促進するために、各編の活用事例を定期的に紹介しています。また、各編の活用を促進するために、各編の活用事例を定期的に紹介しています。

さらに、『ティップス先生からの7つの提案』は、各編の活用事例を定期的に紹介しています。また、各編の活用を促進するために、各編の活用事例を定期的に紹介しています。

学習支援の基本

- キーワードは、Involvement（巻き込む）
- “Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education” by Chickering, A. & Gamson, Z. (1987)
 - 教員と学生が接する機会を増やす
 - 学生間で協力して学習させる
 - 学生を主体的に学習させる
 - 学習の進み具合をふりかえらせる
 - 学習に要する時間を大切に
 - 学生に高い期待を寄せる
 - 学生の多様性を尊重する

31

『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』(2006-)
2009年からはパンフレットのみ新入生全員に配布し、
本体はウェブに掲載



32

学習支援の基本 (とくに初年次教育)

- キーワードは、Transition(移行)
高校生から大学生になるということ Tinto, V. (1988)
- 入学後の6ヶ月が勝負の分かれ目
- 濱名篤(2004), 溝上慎一(2004)
- 「名大スタディティップス」の基本メッセージ
 - 大学で学ぶことの意味を伝える
 - 学生の自尊感情を高める
 - 学問・研究のおもしろさを伝える
 - 協同して学ぶことの大切さを伝える

33

『ティップス先生のカリキュラムデザイン』 (2007)



34

まとめ: 開発型アプローチの可能性

- 現実の教育課題の解決に取り組む
 - これまでの教育学は、どちらかといえば批判科学的な性格が強く、現実課題の解決に大きな貢献してこなかった、と指摘されることが多い
- 教材、ハンドブック、ガイドラインなどの「実物」によって、具体的な対応策を提案する
 - 従来は論文を書くこと自体が目的だった。
- 理論と経験知の統合
 - 教育学者と教育経験豊かな教員の協同

35

まとめ: 開発型アプローチの課題

- 自大学の教育・学習支援サービスと、高等教育研究を深化させることは両立できるのか？
- 論文化が困難
 - 開発プロセスは論理だけでは説明がつかない(直感、論理飛躍、開き直りなど)。
- 誤解を受けやすい
 - 効果測定は容易でない(ちょっと研修を受けたくらいですぐに効果が出るなら苦労しない)
 - 効果測定は自画自賛に受け取られる恐れがある

36

第3回桜美林学園 大学教育開発センター 調査・研究開発部門 公開研究会 「名古屋大学における教育・学習支援教材の開発に学ぶ」に参加して

大学教育開発センター調査・研究開発部門研究員／総務部人事課 係長
岩野 英隆

現在、人事課にて職員の採用・研修の実務に携わる立場として、日頃から他の大学では、どのように職員研修や育成を行っているかについて、非常に高い関心を持っております。

幸いにも大学教育開発センターでの業務に末席ながら携わる機会を与えていただき、今回の研究会に参加出来たことで、貴重な情報を得ることが出来ました。

講師を務めていただいた近田政博先生は「ティーチング・ティップス」の開発で有名な名古屋大学高等教育研究センターの中核を担う方であり、教員向けのティップス開発については存じ上げていたのですが、職員に対するティップスの開発については、恥ずかしながら全く存じ上げておりませんでした。

昨年度に本センターが実施した第1回学内シンポジウムで、私の上司である人事課長が本学における職員研修制度の実情と今後の取り組みについて発表を行った際も、一般教職員の参加が多く、改めて人事課として真剣に取り組むべき課題であると実感いたしました。

今回、この研究会への参加にあたり、研究員というよりはむしろ人事課員としてより強い思いで参加させていただきました。

大学教育の質向上の為には、教員のみならず、学生そして職員も皆それぞれの立場で重要な役割を担っており、そのような背景が様々なティップスの開発に繋がってきたという経緯も知ることが出来ました。

国公立大学法人と私立大学といった立場の違いはあれ、直面する課題は共通するものが大変多く、名古屋大学で作成された教務学生担当職員向けのティップスについては、職員の立場で如何に学生の教育に携わっていくかについて、簡潔かつ明瞭であり、十二分に練られた内容で記載されていることに、大変感銘を受けました。

本学でも新規に採用した専任職員の配置については、学生と直接接する部門である教務課などが多く、その際の研修については人事課として何か実施出来ることはないかと検討しておりました。本学の職員研修については、学校職員としての包括的な研修体系を構築し始めたばかりであり、専門別の研修については、各部署に任せているというのが現状です。

今回近田先生からお聞きした話は、昨年度から実施し始めた職員採用方法～入職前研修、初年時職員研修を行うに際して、すぐにでも参考とさせていただき、より良いものに改善してきたいというモチベーションをより高めるものでありました。

以上

第4回 桜美林大学 大学教育開発センター 調査・研究開発部門 公開研究会

カナダにおけるカリキュラム開発研究に学ぶ

2010年2月15日(月) 11:00-12:30

於 桜美林大学 四谷キャンパス Y308 教室

大学教育開発センター 調査・研究開発部門主催、第4回公開研究会が、四谷キャンパス Y308 教室において行われました。

これまでの研究会は、主に、Instructional Development の視点から捉えた課題についてでしたが、今回は Curriculum Development の視点から、「カナダにおけるカリキュラム開発研究に学ぶ」と題し、The University of British Columbia 准教授の Harry Hubball 先生をお招きしてご講演いただきました。

学士課程教育の充実に向けて、学習者主体のプログラム開発の重要性、学士課程の4年間に渡ってラーニング・ポートフォリオを作成していくことの教育的効果など、具体的なカリキュラム開発の視点を伺うことができました。また、会場からは、カナダの教員組織や教育組織についても質問が及び、活発な意見交換がおこなわれました。

プログラム

11:00～11:05 開会
(司会) 井下 千以子 (調査・研究開発部門、基盤教育院教授)

11:05～12:05 「カナダにおけるカリキュラム開発研究」
Harry Hubball 先生 (The University of British Columbia 准教授)

12:05～12:30 質疑・討論
(コメント・通訳) 土持 ゲーリー法一 先生 (弘前大学 21世紀教育センター 教授)

Integrating program-level learning outcomes and institutional teaching development plans: The scholarship of undergraduate degree programme reform

J.F. Oberin University, February 15th, 2010

Dr. Harry Hubball,
Department of Curriculum & Pedagogy
University of British Columbia
Canada



Curricula Re-design Contexts in Higher Education
(1995-Present)

- Arts and Social Sciences (WAGS)
- Applied Sciences
- Business
- Dentistry
- Human Kinetics
- Law
- Pharmaceutical Sciences
- Nursing
- Science
- Senate Curriculum Committees
- *Institutional, Canadian and International Program/Curricula Reform*

Canada, US, Australia, Fiji, NZ, UK, China, Switzerland, Dubai, West Indies, Scotland, Hong Kong, Singapore

Table 2. Implementation Analysis: SoCP

Q. 1 What are critical factors when institutions/Faculties/Academic Units develop program-level learning outcomes?

Q. 2 To what extent are learning outcomes reflected in program learning experiences?

Q. 3 When and how do students demonstrate learning outcomes in this context?

Q. 4 What are the overall reflections for implementation and alternative applications of learning outcomes to other academic activities in this context?

Outline

- * Context for Learning-centred Program Reform & Staff Development: Global and Local Factors
- * Developing Learning-centred Curricula & Teaching Development Initiatives: Theory-Practice Integration
- * Critical Challenges and Curriculum/Faculty Support Initiatives

The Scholarship of Curriculum & Pedagogy Practice

**CONTEXT FOR CURRICULUM RE-DESIGN:
Multiple Factors Influencing Change**

- **Global, National, Regional Initiatives** (E.g. NSSE)
- **Social and Economic Challenges**
- **Significant Curricular & Pedagogical Shifts**
Prior Learning Assessment (PLA), Learning Outcomes, Interdisciplinarity, Internationalisation, Learning Technologies
- **“Triggering Opportunities”**: External and Internal
Accreditation, Retirements, Faculty/Student Satisfaction levels, Collaboration with Outside Units (e.g., Professional/Industrial)

(Barab & Duffy, 2000; Bresciani, 2006; Gold, 1997; Kupperschmidt & Burns, 1997; Hubball & Burt, 2004; Schneider & Schoenberg, 1999)

Broader / Professional / Provincial Contexts

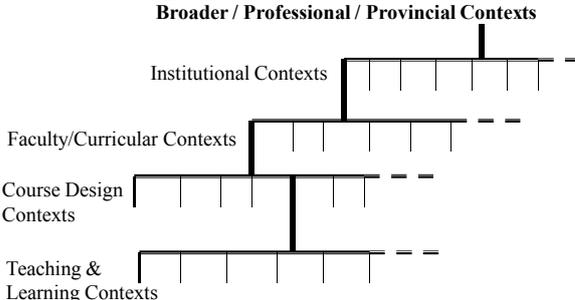
Institutional Contexts

Faculty/Curricular Contexts

Course Design Contexts

Teaching & Learning Contexts

**Integration/Alignment Model of Programme-Learning Outcomes:
2-Way Macro-Meso-Micro Impacts
Implications for Research, Development & Implementation**



Underlying Assumptions about Learning-centred Curricula

- Representative students, faculty, and stakeholders in the broader context should be active participants in the curricular reform process (Learning Communities)
- Academic units will implement curricula in diverse ways and are at different/complex stages of curricular reform, and they progress at different rates (Individual and Social Contextual Process)
- Learning-centred curricula focus on contextually-bound learning outcomes and integration of diverse pedagogies (Diversity and Integration)
- Learning outcomes focus on higher order and integrated abilities (KAS) in the context of a field of study, and are designed to be assessable, transferable, and relevant to learners' lives as workers and citizens in a diverse world (Relevance)

(Barr & Tag, 1995; Bresciani, 2006; Cox, 2004; Hubball & Burt, 2004; Hubball & Poole, 2003; Shulman, 1999).

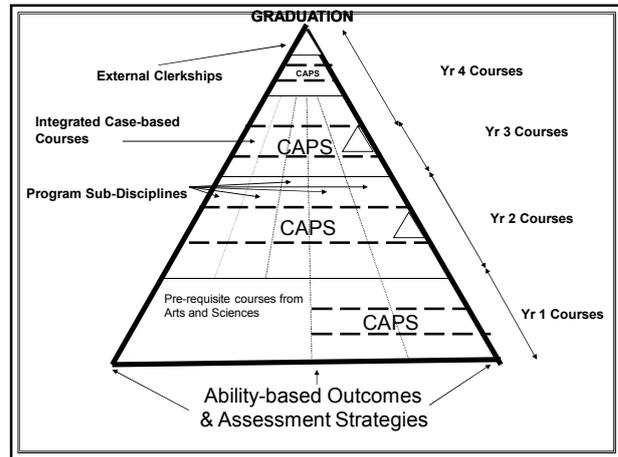
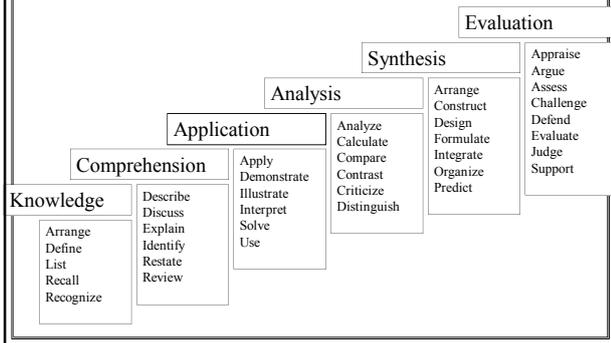
EXAMPLES OF INSTITUTIONAL AND PROGRAM-LEVEL LEARNING OUTCOMES

In the context ofthe ability to demonstrate (KAS):

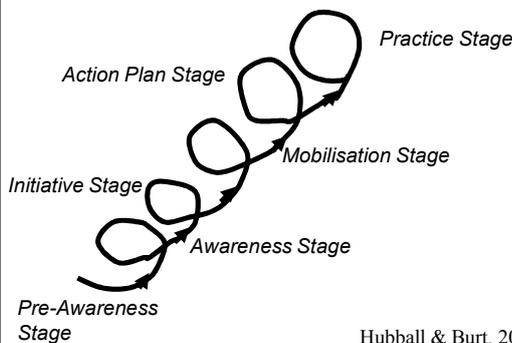
- * the acquisition, application and integration of knowledge
- * research skills, including the ability to define problems and access, retrieve and evaluate information
- * critical thinking and problem-solving
- * proficient literacy and numeracy skills
- * responsible use of ethical principles
- * effective leadership, communication and interpersonal skills

(Barab & Duffy, 2000; Bresciani, 2006; Gold, 1997; Kopperschmidt & Burns, 1997; Hubball & Gold, 2007; Schneider & Schoenberg, 1999).

Bloom's Taxonomy



(PAIMAP) Stages of Curricular Reform



SUPPORTING CURRICULAR & TEACHING CONTRIBUTIONS IN ORDER TO REALISE INSTITUTIONAL GOALS

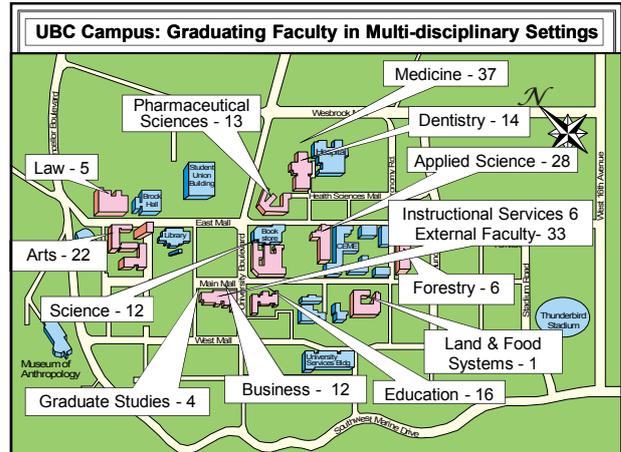
INSTITUTIONAL AND FACULTY LEVELS

- Tenure and Promotion Process
- Curriculum Leadership Awards
- Innovative Course Design Awards
- Scholarship of University Teaching and Teaching Excellence Awards
- Faculty Certificate Program: *The Scholarship of Teaching, Learning & Curriculum Practice (SoTL/SoCP)*
- Curriculum Development and Pedagogy Support Service

Context of SoTL Leadership: UBC Faculty Certificate Program on Teaching and Learning in Higher Education

- Began in 1998 - Focus on SoTL (Curricula, Course Design and Pedagogy)
- 8-month Mixed-mode cohort program
- Tenure-track, tenured, teaching award winners, - 200 Grads (International, national, provincial & UBC faculty)
University President awards Certificates

(Hubball & Poole, 2004; Hubball, Pratt & Collins, 2005; Hubball & Burt, 2006; Hubball & Albon, 2007)



FCP & the Scholarship of Teaching and Learning: Institutional Indicators

- **Changes in policies** (e.g., T & P), **organizational support strategies** (e.g., Uni Pres., Scholarships, Institute for the SoTL, budgets, awards and grant schemes)
- Increase in **faculty-level contributions**
- Enhances FLC's, curriculum, pedagogy and student learning outcomes on campus!

Research Outcomes & Key Lessons Learned:

SoCP and Implementation Analysis

- Accreditation was the single biggest factor to influence the implementation of program-level learning outcomes
- Strong (and adequately supported) curriculum leadership and the ability to engage the WHOLE learning community (including a critical mass within the sub-disciplines), through open dialogue and various communications and dissemination of SoCP
- Flexibility to align bottom-up and top-down LO processes
- Guest speakers and external consultants
- Substantial time, effort and varying degrees of contribution and responsibility requires comprehensive Institutional and Faculty-level support/structures - Surface & deep levels of SoCP
- Additional support required to target, champion and show-case best practices (innovation-leadership-integration)

Hubball & Gold, 2007

The Scholarship of Curriculum Practice in Higher Education

Thank you...Discussion Welcome

- * Questions? Goal Setting?
- * Challenges / Alternative Strategies?
- * Comments/reflections?



図書紹介

①近田政博『学びのティップスー大学で鍛える思考法』 (玉川大学出版部、2009年)

ユニバーサル・アクセス時代の初年次教育 ——ティーチング・ティップスからラーニング・ティップスへ

大学教育開発センター調査・研究開発部門研究員／リベラルアーツ学群 教授
中島 吉弘

私は、池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹著『成長するティップス先生ー授業デザインのための秘訣集』(玉川大学出版部、2001年)が刊行される1年前、ウェブページ上で公開された名古屋大学のティーチング・ティップスの存在を知り、以後そこから多くを教えられてきた者の一人である。当時、受講生にとって魅力ある授業設計や納得のいく授業デザインのあり方、成績評価の基準や手法、学生のような要望や反応への適切な対処法等についての研修がなく苦慮していた私にとって、この名古屋大学の授業秘訣集は授業改善のための大きな手がかりを与えてくれたのであった。

あれから私なりの創意工夫を重ねながら、はやくも10年の歳月が流れた。その間、大学をとりまく内外の環境は大きく変わり、授業に関連する一連の諸問題もまた次第に意識されるようになってきた。就中、重要だと思われるのは、大学全入時代における初年次教育の問題である。周知のごとく、この問題をテーマとする初年次教育学会が2007年に設立され、その活動も各方面から注目されている。こうした状況のなかで、この度刊行された「大学で鍛える思考法」というサブ・タイトルをつけられた近田政博氏の著作『学びのティップス』は、まさに時宜にかなった企画・刊行といえよう。

以下、この『学びのティップス』の概要について紹介し、論評してみたい。まず「まえがき」では本書のねらいが述べられる。すなわち、「新入生向けに、大学で学ぶことの意味や自発的に学習できるようになるための思考法や方法論についてのアイデアを提供すること、これが本書のねらいである。私は、この本書のねらいに深く賛同する者である。というのも、高校生の学びから大学生の学びへとうまく脱皮できないため、貴重な学生生活をうまく充実させられない事例が身近にも意外と多くみられるからである。現に、日本の多くの大学でも、こうした学生の傾向が確認されるに及んで、初年次教育の重要性が叫ばれ、様々な試みが模索されはじめている。本書は、こうした状況に対する具体的な処方箋を学びのティップス (tips : 学びに関する助言や示唆をコツやノウハウとしてまとめたもの) として示しており、その点においても注目に値するといえよう。

さて、本書の第1章では、「これから大学に入学する人」に向けて、「大学で学ぶことの意味」が示される。具体的には、「大学とは『知の共同体』である」、「学識はあなたの視野を広げ、先入観から解放してくれる」、「学識とは信念や生き方でもある」、「大学教員は教

師である前に学習者としてのあなたの先輩である」、「他者の生命、人格、学習を尊重しよう」といった意味について語られる。私の観点からみて、とりわけ重要だと思われるのは、大学の学びの基本として重視されるべきリベラルアーツに触れている点である。近田氏はこう述べている。「大学の教養教育の原語である『リベラルアーツ』という言葉には、『人間をさまざまな制約から自由にする』という意味が含まれています。こうした制約には、あなたがこれまで無意識に培ってきたさまざまな先入観や偏見なども含まれています。大学で学問を修めることによって、自分自身のなかにこうした制約があることに気づき、物事を相対化して考える習慣が身につくようになります。」(15頁) このくだりは極めて重要である。なぜなら、リベラルアーツとは専門のための単なる基礎知識でも雑多な知識の集積でもなく、また多様な専攻からお好みのコースを定める選択肢の多様性でもなく、学生の学びや大学教員の研究・教育そのものが、既成の先入観や偏見から人々を自由にし、解放する知の営みだからである。

ところで、人々が先入観や偏見から自由となり解放されることは、「学識ある市民」となるための必要条件ではあるが、十分条件ではない。というのも、彼らにはある共通する「心の姿勢」が十分条件として求められるからである。つまり「学識ある市民」には、(1)「人類の知的遺産に対する畏敬の念をもつ」、(2)「知ること、学ぶ事への努力をあきらめない」、(3)「学び、知るための努力が同時に生きる喜びでもある」、(4)「学んだことを人々のために活かそうとする」、(5)「人類の知的遺産を次代に継承するリレー走者であろうとし、そのことを誇りに思っている」といった「心の姿勢」が不可欠なのである。

次に、第2章「大学の授業・学習に適応する方法」をみてみよう。ここでは、「大学に入学したばかりの新入生向けの内容」が全15のティップスにまとめられ、わかりやすく解説されている。たとえば、「キャンパスを探索してみよう」、「大学のカリキュラム構造を知ろう」、「むやみにたくさんの授業を履修しない」、「授業ごとに異なるルールを確認しよう」、「教員と顔なじみになろう」、「ノートをとることは思考の整理になる」、「仲間から学ぼう」、「授業レポートでは『問いの展開』が大事だ」、「人に読んでもらえる日本語を書こう」、「夏休みに本を読み、名画を観て、身体を動かし、旅をしよう」などの学びのティップスが示されている。これらのティップスは、どれもあたりまえの常識のように思われるかもしれない。しかし、全入時代の新入生にとっては、それらはあたりまえの常識とは思われていない。かつて、大学ではこれらの常識は暗黙知(tacit knowledge: 言語でははきりと表現できない直観知、身体知、体得知、技能知)として受け継がれ活かされてきたが、今やそれらは瀕死の状況にある。この状況は大学にとって極めて危機的である。なぜなら、この暗黙知が、大学の用意する学びの環境や制度を真に活かすものだからである。

こうした危機的な状況にありながら、暗黙知はこれまで言語化されマニュアル化されることはほとんどなかった。この暗黙知は、制度としては入学時のオリエンテーションやアカデミック・アドバイザーその他によって、フォーマルな次元で個別に伝えようと試みられてきたのかもしれない。だが、新入生の目線からすれば、この暗黙知は入学当初に共有

をはかられるべき最低限の基本情報ではなかろうか。たとえば、入学時に桜美林学園の建学の理念や歴史（→自校史）をキャンパスにある各所のモニュメント（たとえば、本学の図書館本館入口階段下にあるペスタロッチの胸像や以徳館前の中江藤樹像など）や桜美林資料展示室（其中館 2 階）などへの探索から知ることが、自己が桜美林大学生として学ぶことの意味に気づき、誇りをもつ機会となるにちがいない。さらに、大学が提供するフォーマルな学びとは別に、インフォーマルな学びを支える人間関係、たとえば研究サークルや読書会の活動における仲間同士の自発的な学び合いは、学生時代はもとより卒業後の人生をのみり豊かにする潜在能力（capability）の育成機会となるはずである。

最後に、第 3 章「自ら学ぶ習慣を身につける方法」をみてみよう。ここでは、「大学生活全般において、自発的に学ぶ習慣をつけるための思考法や行動ノウハウ」が全 17 のタイプにまとめられている。たとえば、「大きな目標を小さく分解し、優先順位をつけよう」、「自分の体内リズムをつかもう」、「起動を速く」、「あこがれの人を見つけよう」、「新書や古典にチャレンジしよう」、「一人になれる時間と空間をつくろう」、「塗って、折って、書いて、話す」、「人と話が合わない経験をすることも大事だ」、「英語だけに頼らない」、「『鳥の眼』と『虫の眼』をもとう」、「当事者意識をもとう」、「『自分探し』よりも、目の前のことに打ち込むべし」、「逃げ場をつくろう」などの学びのティップスが示されている。

こうした学びのティップスからは、学生としての本務を卒業するまで自覚できない、生活上の課題を仕分けて優先順位を付けられない、自己の体内リズムを見失って若さにふさわしい集中力を発揮できない、起動がつねに遅れるために、能力や素質が効果的に訓練されず結果として評価されない、「人に言われたからやる」外発的学びにとどまり、「自分がやりたいからやる」内発的学びへの自己脱皮をなかなか果たせない等々のケースの解決法や対処法のヒントが見えてくるのではなかろうか。以上はそのどれをとっても、大学生活全般において必要かつ不可欠な暗黙知である。だが、ひるがえっていえば、現代の学生はこの暗黙知に基づいて自発的に学ぶ習慣をうまく身に付けられないでいる。では、どう対処したらいいのか。ここにはこの問いへの答えが、気づきと行動を促す標語として示されている。

以上、本書のねらいと章構成ならびに概要を紹介しつつ、若干の論評を試みた。次に、本書がもつ特徴や活用法、意義について私見を述べてみたい。

第一に、本書は企画とレイアウトが初年次の学生に照準を定め、彼らへの必要かつ不可欠なメッセージを太字の縦書きや横書きで簡潔に示し、ほぼ見開き 2 頁に収まるよう解説をまとめているため、ストレスをまったく感じることなくすぐに読みきれる点である。

第二に、大学入学時のオリエンテーション終了後の初年次セミナー等において活用されるならば、本書は学士課程の学びを効果的に起動させ、充実させるように働くであろう。ただし、活用には、教員からの一方通行的な提示は避けて、学生の当事者感覚に即しながら、音読や要約、議論、課題等の具体的な作業を取り入れつつ、本書の内容を実践のなかで自覚させるならば、教育効果がより高まるだろう。

第三に、大学生活が現下の社会経済的諸要因のゆえに、かつてのようなゆとりある形では成立せず、3年次から就職活動に駆り立てられる現状に鑑みれば、大学の初年次に学士課程の生活を充実させるための『学びのティップス』を各大学の現状に照らし合わせ修正・改良しながらしっかりと伝えておくことは、教育効果上、重要な意味をもつといえるだろう。

最後に敷衍していえば、周知のごとく日本社会は少子・高齢化（→18歳人口の急減）と経済のグローバル化（→新自由主義的規制緩和）という大状況の下で、大学はユニバーサル・アクセスの段階（全入時代）に入っている。こうした歴史的状況のなかで、日本の大学の多くは、いまやかつてのマスやエリートの段階の学生とは次元を異にする学生（→真剣に学ぶことなく卒業へと至る大量の学生）の存在に遭遇している。別言すれば、全入時代に付随する学士課程の意味の劣化が背景要因となって、彼らの学びが内発的な意欲と社会的な自覚に支えられた自己展開としては成立しがたくなっている。日本の大学の置かれたこうした危機的な現状を反省しつつ、目前の課題に実践的に対処しようとするとき、小著とはいえ、近田氏の近著『学びのティップス』は、私たちに多くの手がかりを与えてくれるはずである。

②東北大学高等教育開発推進センター編『研究・教育のシナジーとFDの将来』
(東北大学出版会、2008年)

大学教育開発センター調査・研究開発部門研究員／基盤教育院 専任講師
鳥井 康熙

本書は、平成19年6月3日に開催されたシンポジウム『研究・教育のシナジーとFDの将来』の成果をまとめたものである。このシンポジウムは、平成17年度より3年間にわたり実施されている「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクトの一環として行われた。

第1章では、東北大学高等教育開発推進センターの教員によるFDへの提案が行われている。羽田貴史氏（東北大学）は、研究と教育の調和について、また、関内隆氏（東北大学）は、プロジェクトの概要について紹介している。中島（渡利）夏子氏（東北大学）と中島平氏（東北大学）は、国際連携プロジェクトにおけるスタンフォード大学との連携に基づき、客員研究員としてスタンフォード大学に行き、その成果を報告している。スタンフォード大学では、日本からの参加者を対象にしたFD研修があり、研修ではコースデザインワークショップ、授業見学、スタンフォード大学の教員との昼食などが盛り込まれている。

第2章では、スタンフォード大学 Center for Teaching and Learning (CTL) のディレクターであるマリコビッチ氏が、CTLの役割とスタンフォード大学でのFDについて紹介している。

第3章では、『研究・教育のシナジーとFDの将来』として、まず、鈴木敏之氏（文部科学省）がFDをめぐる大学政策について紹介している。次に、田中每実氏（京都大学）が、FD全体の趨勢は啓蒙段階を超えて相互研修型に向かっていると指摘している。京都大学のFD状況、京都大学における教育改善・FDについてのヒアリング調査、公開授業・検討会、大学院生のための教育実践講座を紹介している。また、関西地区の大学のFD連携について紹介している。愛媛大学からは佐藤浩章氏が同大学におけるFDの取り組みとして、FDスキルアップ講座、ファカルティ・ディベロッパー養成講座、教育コーディネータ研修などを紹介している。これらの報告を受けて、東北大学として今後のFDへの取り組みのビジョンについて述べている。

第4章は、主要大学におけるFDの取り組みとして、山形大学、青山学院大学、東京農工大学、名古屋大学、同志社大学、神戸大学、広島大学、熊本大学の取り組みが紹介されている。

本書では、多様なFDの取り組みが紹介されており、個別の大学がおかれている状況について知る機会となる一冊である。

【資料編】

2009年度 大学教育開発センター 活動日誌	41
桜美林大学 大学教育開発センター スタッフ一覧	42
FD・SD 関係文献目録 (2009)	43

2009 年度 活動報告

- 4 月 30 日 第 6 回 センター会議
- 5 月 7 日 第 7 回 FD・SD 部門会議
- 5 月 12 日 第 9 回 情報評価・分析 (IR) 部門会議
- 5 月 19 日 第 4 回 調査・研究開発部門会議
- 5 月 28 日 第 7 回 センター会議
- 6 月 9 日 第 5 回 調査・研究開発部門会議
- 7 月 31 日 「桜美林大学 大学教育開発センター Newsletter No.02」発行
- 9 月下旬 経常費補助金関係の FD 調査に協力
- 10 月 21 日 第 8 回 FD・SD 部門会議
- 11 月 9 日 外部団体による SD に関するヒアリング調査に協力
- 12 月 7 日 第 3 回 大学教育開発センター学内シンポジウム
- 12 月 15 日 第 6 回 調査・研究開発部門会議
- 12 月 21 日 第 10 回 情報評価・分析 (IR) 部門研究会
- 12 月 22 日 第 3 回 大学教育開発センター公開研究会
- 1 月 18 日 「桜美林大学 大学教育開発センター Newsletter No.03」発行
- 1 月 26 日 第 4 回 大学教育開発センター学内シンポジウム
- 1 月下旬 外部団体による格付け調査の FD 関係ヒアリングに協力
- 2 月 15 日 第 4 回 大学教育開発センター公開研究会
- 2 月 16 日 第 7 回 調査・研究開発部門会議
- 3 月上旬 年報、Fact Book 編集会議を数回 (予定)
- 3 月 31 日 「2009 年度 桜美林大学 大学教育開発センター年報」発行 (予定)
- 同 日 「桜美林大学 Fact Book 2009」発行 (予定)

※この他、本年度は全学自己点検・調査委員会の立ち上げに全面的協力を行った。

桜美林大学 大学教育開発センター
スタッフ一覧（2009年度）

佐藤 東洋士	センター長
武村 秀雄	センター次長
馬越 徹	調査・研究開発部門主任
井下 千以子	調査・研究開発部門研究員（※1）
中島 吉弘	調査・研究開発部門研究員
鳥井 康熙	調査・研究開発部門研究員
岩野 英隆	調査・研究開発部門研究員
舘 昭	FD・SD 部門主任
吉田 恒	FD・SD 部門研究員
堀 潔	FD・SD 部門研究員
松久保 暁子	FD・SD 部門研究員
松ノ下 昭人	FD・SD 部門研究員
鈴木 克夫	情報評価・分析（IR）部門主任
掛川 真市	情報評価・分析（IR）部門研究員
野坂 尊子	情報評価・分析（IR）部門研究員
須賀 紀弘	情報評価・分析（IR）部門研究員
寺田 洋一	情報評価・分析（IR）部門研究員
橋爪 孝夫	補助研究員

※1 2009年9月より調査・研究開発部門主任代行

FD・SD関係文献目録（2009）

※凡例

1. 文献目録は論文編と単行書編から成る。
2. 2009年に発表・発行された広い意味でのFD・SDに関する文献を収録した。
3. 出典は国立国会図書館のNDL-OPACに依る。
4. 本目録の編集は橋爪孝夫が担当した。

（修正・追加等のご意見を hasizume@obirin.ac.jp までお寄せ下さい）

FD・SD 関係文献目録(2009) 1. 雑誌・紀要掲載論文

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
1	授業観察アノテーションシステムFD Commons を利用したFD活動支援(新しいデバイスと教育システム/一般)	加藤 由香里(カトウ ユカリ); 江木 啓訓(エキ ヒロノリ); 塚原 渉(ツカハラ ワタル) 他	教育システム情報学会研究報告	教育システム情報学会	23(5)	2009.01	24-27	
2	大学教育における学習ガイドブック作成の現状と課題—福島大学の『学びのナビ』(試作品)を事例として	板橋 孝幸(イタバシ タカユキ)	福島大学総合教育研究センター紀要	福島大学総合教育研究センター/福島大学総合教育研究センター 編	(6)	2009.01	41-48	
3	学生の授業観とFD—人間発達文化学類の2年生アンケートから	森田 道雄(モリタ ミチオ)	福島大学総合教育研究センター紀要	福島大学総合教育研究センター 編	(6)	2009.01	65-72	
4	第6回教育FD研究会 テーマ 授業の工夫		理学療法科学	理学療法科学学会 編	24(1)(通号-)	2009.01	17-23	
5	学生による模擬患者演習の試みと改善点の検討—フィードバック内容・方法に着目して(第6回教育FD研究会 テーマ 授業の工夫)	下井 俊典	理学療法科学	理学療法科学学会 / 24(1)(通号-)	(特別)	2009.01	21-23	
6	激変の時代における事務職員の果たすべき役割(6)SDから誕生した山形大学「エリアキヤンパスもがみ」	小田 隆治	私学経営	私学経営研究会	(408)	2009.02	37-52	SD
7	個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組み	玉田 和恵; 神部 順子; 海老澤 邦江 他	情報と社会	江戸川大学 / 江戸川大学 [編]	(19)	2009.02	293-303	
8	八戸工業大学におけるリメディアル英語教育と教科書作成の取り組み	桃井 龍慈(モモイリュウジ); 町屋 昌明(マチャマサアキ); 岩村 満(イワムラミツル) 他	八戸工業大学紀要	八戸工業大学 / 八戸工業大学図書委員会 編	28	2009.02	229-241	
9	中教審答申への対応と電子情報学科の科目編成	竹中 久(タケナカ ヒサシ)	いわき明星大学科学技術学部研究紀要	いわき明星大学科学技術学部研究紀要編集委員会	(22)	2009.03	58-62	
10	大学の授業を改善させる組織的取り組み—FD 渡辺 義和(ワタナベヨシカズ)の挑戦(特集 英語教師として自分を見つめ直す方法)		英語教育	大修館書店 / 大修館書店 [英語教育] 編集部 編	57(13)	2009.03	30-32	

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
11	教育支援システム「[n] Assistant(アシスタント)」の開発と全学的導入(eラーニング環境のデザインと実践運用)	江本 理恵(エモトリエ)；後藤 尚人(コトウ ナオト)	教育システム情報学会研究報告	教育システム情報学会	23(7)	2009.03	95-103	
12	教育を主とした大学を目指すには--フィードバック・ループ型教育の提案	武藤 宣道(ムトウ ノブミチ)	経営研究	愛知学泉大学経営研究所 / 愛知学泉大学経営研究所 [編]	22(2) (通号 53)	2009.03	149-170	
13	FDと英語教育	中鉢 恵一(ナカバチ ケイイチ)	経営論集	東洋大学経営学部	(73)	2009.03	117-125	
14	教職の専門性と教職員の職能発達--教育現実からの再設計(特集 教員のキャリア形成と教職の専門職性)	木岡 一明(キオカ カズアキ)	現代学校研究論集	京都教育大学公教育経営研究会	27	2009.03	1-10	SD
15	携帯電話等を利用したFDの試み(第四回e-Learning研究会報告)	木阪 貴行(キサカ タカユキ)	国士館大学情報科学センター紀要	国士館大学情報科学センター / 国士館大学情報科学センター編	(30)	2009.03	61-71	
16	授業を開発し共有化するFDに関する一考察	小田 隆治	山形大学高等教育研究年報	山形大学高等教育研究会企画センター	(3)	2009.03	34-37	
17	FDネットワークを評価する--FDネットワーク"つばさ"の一年を振り返って	杉原 真晃	山形大学高等教育研究年報	山形大学高等教育研究会企画センター	(3)	2009.03	38-47	
18	本学「松本短期大学」におけるFD活動の現状と課題--アンケート調査結果からの分析	小岩井 きし子(コイワイ キシコ)；渡邊 裕子(ワタナベ ユウコ)；浦田 真理子(ウラタ マリコ) 他	松本短期大学研究紀要	松本短期大学	(18)	2009.03	73-81	
19	FD資料 新任教員の春学期--4か月間の授業と学生についての私的記録(上)	川畑 隆(カワバタ タカシ)	人間文化研究	京都学園大学人間文化学会	(23)	2009.03	87-113	
20	大学の歴史からみたFD制度化の道程と課題	中房 敏朗(ナカフサトシロウ)	仙台大学紀要	仙台大学学術会 / 仙台大学学術会編	40(2)	2009.03	195-220	
21	文化論と英語教育--FDの視座から臨む語学学習者に対する動機づけへの一考察	高橋 紀穂(タカハシ キホ)	太成学院大学紀要	太成学院大学	11 (通号 28)	2009.03	183-193	
22	学生・職員・教員参加型の教養教育FD活動--UD(University Development)活動としての意義	光永 雅子(ミツナガ マサコ)；中恵 真理子(ナカエ マリコ)；Steve T. Fukuda 他	マリア大学教育研究ジャーナル	徳島大学	(6)	2009.03	161-170	

No 論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
23 2008年度徳島大学全学FD推進プログラムの実施報告	曾田 紘二(ソダ コウジ); 宮田 政徳(ミヤタ マサノリ); 川野 卓二(カワノ タクジ) 他	大学教育研究ジャーナル	徳島大学	(6)	2009.03	171-189	
24 基調講演 山口大学と立命館大学におけるカリキュラムポリシーの構造化(学士課程の専攻プログラム化--第18回全学FD)	沖 裕貴	大学教育研究年報	新潟大学教育開発センター/新潟大学教育開発研究センター〔編〕	(13)	2009.03	101-20〔含抄録〕	
25 学生支援プログラムの実践に向けて--第19回全学FD 基調講演 問題解決活動としての総合プログラムの組織化と評価	加藤 幸次	大学教育研究年報	新潟大学教育開発センター/新潟大学教育開発研究センター〔編〕	(13)	2009.03	121-137〔含抄録〕	
26 世界の大学改革事情(5)欧州高等教育における変化--教授中心から学習中心の教授法への転換を支援するFDプログラム	Brigitte Berendt; 津田 純子 訳; 加藤 かおり 他 訳	大学教育研究年報	新潟大学教育開発センター/新潟大学教育開発研究センター〔編〕	(13)	2009.03	153-172	
27 21世紀高等教育の国際的ヴィジョン(第17回全学FD)		大学教育研究年報	新潟大学教育開発センター/新潟大学教育開発研究センター〔編〕	(13)	2009.03	77-84	
28 学士課程の主専攻プログラム化--第18回全学FD		大学教育研究年報	新潟大学教育開発センター/新潟大学教育開発研究センター〔編〕	(13)	2009.03	85-120	
29 講演 新潟大学における主専攻プログラム化の取り組み(学士課程の主専攻プログラム化--第18回全学FD)	濱口 哲	大学教育研究年報	新潟大学教育開発センター/新潟大学教育開発研究センター〔編〕	(13)	2009.03	87-99	
30 「教養教育に関するFD研究会2008」実施報告	折田 充	大学教育年報	熊本大学教育開発センター 熊本発総合研究センター	(12)	2009.03	31-38	
31 FDの牽引役から支援役へ(小特集 大学における教育センターの役割)	関田 一彦(セキタカ スヒコ)	大学時報	日本私立大学連盟	58(325) (通号 340)	2009.03	80-83	
32 質保証の枠組みにおける豪州大学のインスティテュショナル・リサーチと教育改善--シドニー大学およびメルボルン大学の事例を通し	鳥居 朋子(トリイ トモコ)	大学評価・学位研究	大学評価・学位授与機構/学位授与機構編	(9)	2009.03	43-61	

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
33	[朝日大学]留学生別科実践報告—日本語教師の立場から言えること	久野 かおる(クノカオル)	朝日大学留学生別科 紀要	朝日大学留学生別科 / 朝日大学留学生別科 編	6 (通号 6)	2009.03	31-47	
34	帝京大学文学部教育学科2008年度入学生の実生活実態に関する調査研究	柴田 彩千子 ; 浪越 一喜	帝京大学文学部教育学科紀要	帝京大学 / 帝京大学文学部教育学科 [編]	(34)	2009.03	81-96	
35	特集 養護教諭の士力とは		日本養護教諭教育学会誌	日本養護教諭教育学会 / 日本養護教諭教育学会 [編]	12(1)	2009.03	1-24	
36	士力と養護教諭養成教育 (特集 養護教諭の士力とは)	高橋 香代(タカハシカヨ)	日本養護教諭教育学会誌	日本養護教諭教育学会 / 日本養護教諭教育学会 [編]	12(1)	2009.03	13-17	
37	養護教諭養成教育における士力について (特集 養護教諭の士力とは)	鎌田 尚子(カマタヒサコ)	日本養護教諭教育学会誌	日本養護教諭教育学会 / 日本養護教諭教育学会 [編]	12(1)	2009.03	1-5	
38	大学教育への期待—社会のニーズを見据えた養護教諭の役割と課題から (特集 養護教諭の士力とは)	香田 由美(コウダ ユミ)	日本養護教諭教育学会誌	日本養護教諭教育学会 / 日本養護教諭教育学会 [編]	12(1)	2009.03	19-24	
39	士力と養護教諭の構築に向けて (特集 養護教諭の士力とは)	竹本 浩伸(タケモトヒロノブ)	日本養護教諭教育学会誌	日本養護教諭教育学会 / 日本養護教諭教育学会 [編]	12(1)	2009.03	7-11	
40	士力と養護教諭の構築に関する先進校調査プロジェクト報告—2008年度サマーレビュー2—FDとSDのシナジー融合に関する質疑・応答要旨	岡部 昌樹(オカベマサキ)	年報	金沢星稜大学総合研究所 / [金沢星稜大学総合研究所] [編]	(29)	2009.03	63-70	
41	学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究(2)授業評価アンケートの分析から	田実 深(タジツキヨシ) ; 竹原 卓真(タケハラタクマ)	北星学園大学社会学部北星論集	北星学園大学	(46)	2009.03	65-72	
42	FDIにおける臨床研究の必要性とその課題—授業コンサルテーションの効果測定を事例に	佐藤 浩章(サトウヒロアキ)	名古屋高等教育研究	名古屋高等教育研究センター	(9)	2009.03	179-198	
43	「全国私立大学FD連携フォーラム」を通じた実践的FDプログラムの開発	沖 裕貴(オキヒロタカ) ; 井上 史子(イノウエフミコ) ; 林 徳治(ハヤシトクジ) 他	立命館高等教育研究	立命館大学教育開発推進機構 / 立命館大学教育開発推進機構 編	(9)	2009.03	159-174	
44	FDレポート 大学で蔓延するコピー文化弊害への解決の糸口	吉村 清	琉球大学欧米文化論集	琉球大学法文学部 / 琉球大学法文学部 編	(53)	2009.03	73-97	
45	医学教育と大学教育	村上 千鶴子(ムラカミチズコ)	日本橋学館大学紀要	日本橋学館大学 / 日本橋学館大学紀要編集委員会 編	(8)	2009.03.01	67-77	

No 論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
46 情報セキュリティ監査・診断のための実施計画 実施体制・人材育成および継続運用について(教育工学)	中川 孝司(ナカガワ タカシ); 今井 慈郎(イマイヨシロウ); 武田 亮(タケダ リョウ) 他	電子情報通信学会技術研究報告	電子情報通信学会	108(470)	2009.03.07	123-127	SD
47 2008年度IDEセミナー報告 東海支部 新しい段階に入ったアカデミックレポート	井端 正臣	IDE	IDE大学協会	(509)	2009.04	72-75	
48 講演 教授力とFD (平成20年度 目白大学秋季公開講座 社会が大学に求める力と『学士力』)	井端 正臣	人と教育	目白大学教育研究所	(3)	2009.04	84-92	
49 遠隔講義におけるICTを活用したFDの取り組み	常盤 祐司(トキワユウジ); 野々部 宏司(ノノベヒロシ); 岩月 正見(イワツキ マサ)	JeLA会誌	日本e-Learning学会	9	2009.05	45-54	
50 2008年度第2回全学FDシンポジウム 学士課程教育の改善と学生調査	一橋大学における学生生活・学習プロセス・授業経験-『全国大學生調査』の結果から(2008年度第2回全学FDシンポジウム 学士課程教育の改善と学生調査)	一橋大学教育研究開発センター/一橋大学FDシンポジウム報告書	一橋大学教育研究開発センター	(10)	2009.05	1-75,巻頭2枚	
51 一橋大学における学生生活・学習プロセス・授業経験-『全国大學生調査』の結果から(2008年度第2回全学FDシンポジウム 学士課程教育の改善と学生調査)	朴澤 泰男	一橋大学教育研究開発センター/一橋大学FDシンポジウム報告書	一橋大学教育研究開発センター	(10)	2009.05	35-44[含 抄録]	
52 パネル・ディスカッション 学士課程教育の改善に果たす学生調査の役割(2008年度第2回全学FDシンポジウム 学士課程教育の改善と学生調査)	金子 元久; 盛 誠吾; 筒井 泉雄 他	一橋大学教育研究開発センター/一橋大学FDシンポジウム報告書	一橋大学教育研究開発センター	(10)	2009.05	45-67[含 抄録]	
53 基調講演 大学の教育力と学生調査(2008年度第2回全学FDシンポジウム 学士課程教育の改善と学生調査)	金子 元久	一橋大学教育研究開発センター/一橋大学FDシンポジウム報告書	一橋大学教育研究開発センター	(10)	2009.05	5-34[含 抄録]	
54 参加者アンケート(2008年度第2回全学FDシンポジウム 学士課程教育の改善と学生調査)	金子 元久	一橋大学教育研究開発センター/一橋大学FDシンポジウム報告書	一橋大学教育研究開発センター	(10)	2009.05	69-75	
55 FD Commons:授業改善を支援するツールの開発と評価(教育・学習支援におけるSNSの活用/一般)	寶理 翔太郎(ホウリ ショウタロウ); 加藤 由香里(カトウ ユカリ); 江木 啓訓(エギヒコ ノリ) 他	教育システム情報学会研究報告	教育システム情報学会	24(1)	2009.05	12-15	

No 論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
56 FDプログラムの体系化を目指したFDマップの開発	佐藤 浩章(サトウ ヒロアキ); 長澤 多代(ナガサワ タヨ); 中島 英博(ナカシマ ヒデヒロ) 他	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	136-144	
57 学域・学類への再編に伴うカリキュラム構築と人材育成目標設定の取組(シンポジウム 学士課程教育の改革へのアプローチをどのように進めるか)	西山 宣昭(ニシヤマ ノブアキ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	29-34	
58 教育コーディネーター導入による教育改革の推進(シンポジウム 学士課程教育の改革へのアプローチをどのように進めるか)	柳澤 康信(ヤナギサ ワヤスノブ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	35-38	
59 大学職員発の知識--東京大学業務改善の取組から(シンポジウム『大学人』能力開発に向けて--国立大学の現在)	貝田 綾子(カイダ アヤコ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	42-47	SD
60 主体的な学びのために--「大学の実力」調査から(開催校企画特別シンポジウム 学生の主体的な学びを広げるために)	松本 美奈(マツモト ミナ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	4-7	
61 山形大学SDと大地連携--若手職員発の大学改革の展開(シンポジウム『大学人』能力開発に向けて--国立大学の現在)	山崎 淳一郎(ヤマザキ ジュンイチロウ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	48-53	SD
62 国立大学における職員の能力開発--職員の能力開発を個人の立場から振り返る(シンポジウム『大学人』能力開発に向けて--国立大学の現在)	山本 淳司(ヤマモト ジュンシ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	54-60	SD
63 FDの実施義務化が提起しているもの--諸外国との比較による若干の知見(シンポジウム FDのダイナミックス--FDモデル構築へむけた今後の課題)	夏目 達也(ナツメ タツヤ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	70-75	
64 シンポジウム FDのダイナミックス--FDモデル構築へむけた今後の課題		大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	70-90	
65 「FDモデル」の構築可能性(シンポジウム FDのダイナミックス--FDモデル構築へむけた今後の課題)	田中 每実(タナカ ツネミ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	76-79	
66 FDの今後の課題--ダイナミックス研究からの提言(シンポジウム FDのダイナミックス--FDモデル構築へむけた今後の課題)	絹川 正吉(キヌカワ マサキチ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	80-85	

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
67	課題研究「FDダイナミクス研究の総括討論」と3年間のまとめ(シンポジウムFDのダイナミクス—FDモデル構築へむけた今後の課題)ツカエウサク)	井下 理(イノシタオサム); 大塚 雄作(オオツカ ユウサク)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(1)(通号 59)	2009.05	88-90	
68	カリキュラム経営に関する問題—FD委員会を軸にしたカリキュラム・授業の質向上に向けた取り組み(課題研究報告 教職大学院経営と教育経営研究)	浅野 良一	日本教育経営学会紀要	第一法規 / 日本教育経営学会 編	51	2009.05	132-135	
69	カリキュラムの質保障とFDに関する問題(課題研究報告 教職大学院経営と教育経営研究)	添田 久美子	日本教育経営学会紀要	第一法規 / 日本教育経営学会 編	51	2009.05	140-143	
70	教員研修Web総合システムの継続利用における児童の満足度とICT活用指導力向上に関する検討 (ICTを活用したFD/一般)	山本 朋弘(ヤマモトトモヒロ); 本多 博(ホンダ ヒロシ); 堀田 龍也(ホリタ タツヤ) 他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	101-108	
71	タブレットPC活用の漢字学習授業における児童の意識と教員のICT活用指導力の向上 (ICTを活用したFD/一般)	清水 康敬(シズミヤ スタカ); 山本 朋弘(ヤマモトトモヒロ); 寺下 清(テラシタ キヨシ) 他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	109-116	
72	FD Commonsによる教育改善の展開 (ICTを活用したFD/一般)	加藤 由香里(カトウ ユカリ); 寶理 翔太郎(ホウリン ショウタロウ); 梅田 倫弘(ウメダ ノリヒロ) 他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	11-14	
73	情報源探索および比較に着目した司書教諭のメディアリテラシー実践 (ICTを活用したFD/一般)	福本 徹(フクモトトオル)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	117-122	
74	ICTを活用したFD/一般		日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	1-184	
75	情報活用スキルの指導の継続が児童の習得度に及ぼす効果 (ICTを活用したFD/一般)	塩谷 京子(シオヤ キョウコ); 堀田 龍也(ホリタ タツヤ) 他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	123-128	
76	メディアアに対する批判的思考育成プログラムの開発 (ICTを活用したFD/一般)	後藤 康志(ゴトウヤ スシ); 丸山 裕輔(マルヤマ ユウスケ); 高橋 健(タカハシケン) 他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	129-136	

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
77	メディアが伝える情報の分析活動を取り入れた消費者教育の授業モデルの検討 (ICTを活用したFD/一般)	高橋 伸明(タカハシノブアキ); 宮脇 康一(ミヤウキ コウイチ); 三宅 美弥(ミヤケミヤ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	137-144	
78	高等教育初任者教員の不安・孤独感を緩和する対話システムの開発 (ICTを活用したFD/一般)	重田 勝介(シゲタカツスケ); 館野 泰一(タテノヨシカズ); 大川 内 隆朗(オオカワウチタカアキ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	1-4	
79	これからの子どもに求められる能力にかかわる一考察--全米教育技術能力基準・生徒版に対するイメージ調査 (ICTを活用したFD/一般)	波多野 和彦(ハタノカスヒコ); 奥野 雅和(オクノマサカズ); 山路 進(ヤマジ ススム) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	145-148	
80	ウェブサイトを活用した英語学習者による語彙データの構築とその評価 (ICTを活用したFD/一般)	平田 洋子(ヒラタ ヨウコ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	149-152	
81	FDの一環としての授業収録・オンデマンド配信の実施と試行的評価 (ICTを活用したFD/一般)	尾澤 重知(オザワシゲト); 牧野 治敏(マキノハルトシ); 岡田 正彦(オカダ マサヒコ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	15-21	
82	協同学習と脳科学--言語課題遂行時の脳血流を中心に (ICTを活用したFD/一般)	木下 徹(キノシタトオル); 宮本 節子(ミヤモトセツコ); 今井 裕之(イマイヒロユキ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	153-158	
83	コロナボレーションの心理学--その科学と極意 (ICTを活用したFD/一般)	柏木 肇(カシワギハジメ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	159-167	
84	地域教育ネットワークによる接続教育講座の構築--高大連携校からの入学予定者向けコミュニケーションリテラシー (ICTを活用したFD/一般)	小棹 理子(オザオリコ); 伊藤 善隆(イトウヨシタカ); 田村 新吾(タムラ シンゴ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	169-176	
85	データマイニングによる複数の特徴的なコロナボ集合の抽出とその分類手法について (ICTを活用したFD/一般)	柏木 肇(カシワギハジメ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	177-180	

No 論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
86 LTSPシンククライアントシステムの旧型コンピュータへの適用と教育活用 (ICTを活用したFD/一般)	島田 啓史(シマダヒロフミ); 丹羽 次郎(ニワジロウ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	181-184	
87 FD促進のための3分間コンテンツの開発 (ICTを活用したFD/一般)	佐藤 万知(サトウ マチ); 松本 喜以子(マツモト キイコ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	23-26	
88 ICT活用教育のFD (ICTを活用したFD/一般)	松本 喜以子(マツモト キイコ); 佐藤 万知(サトウ マチ); 渡辺 雄貴(ワタナベ ユウキ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	27-30	
89 コピキタス技術を用いて教室での授業を演出する試み (ICTを活用したFD/一般)	光原 弘幸(ミツハラ ヒロユキ); 伊勢 直史(イセ ナオフミ); 松井 俊憲(マツイ トシノリ) 他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	31-36	
90 米国の大学におけるラーニング・コミュニティの視察報告 (ICTを活用したFD/一般)	酒井 浩二(サカイ コウジ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	37-44	
91 情報の仕組みの見える化による教材開発 (ICTを活用したFD/一般)	渡辺 健次(ワタナベ ケンジ); 山田 成仙(ヤマダ シンゲノリ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	45-48	
92 小学校における組織的な授業研究の推進に関する研究—授業研究を活性化させるためのシステムの構築 (ICTを活用したFD/一般)	細見 隆昭(ホソミ タカアキ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	49-52	
93 『授業実施のPDCSAサイクル』を基盤としたFDシステムの構築 (ICTを活用したFD/一般)	江本 理恵(エモトリ ヒロユキ); 後藤 尚人(ゴトウ ナオト)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	5-10	
94 一斉指導での活用を想定した教授活動ゲームの新機能 (ICTを活用したFD/一般)	松田 稔樹(マツダ トシキ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	53-60	
95 教員に求められる力にかかわる一考察—教員免許状更新講習のワークショップ (ICTを活用したFD/一般)	奥野 雅和(オクノ マサカズ); 波多野 和彦(ハタノ カズヒコ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	61-64	
96 Application of stochastic modeling to study support policy in e-learning (ICTを活用したFD/一般)	中村 正治(ナカムラ ショウジ); 中山 恵子(ナカヤマ ケイコ); 戸川 覃夫(ナカガワ トシオ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	65-68	

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
97	97 キャンパスSNSを活用したキャリア開発力支援 (ICTを活用したFD/一般)	嵯峨山 和美(けがや マカズミ); 金西 計英(かねにし けい) ; 松浦 健二(まつう けんじ) 他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	69-72	
98	98 パーソナルブランド構築とキャリアデザインのためのプレゼンテーションデザイン教育 (ICTを活用したFD/一般)	武田 亘明(たけだ のぶあき); 柿山 浩一郎(かきやま こういちろう) 他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	73-80	
99	99 タッチスクリーンを活用した数学のWeb学習支援システムの実装 (ICTを活用したFD/一般)	郡司 貴之(ぐんじ たかユキ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	81-84	
100	100 教職大学院におけるミドルリーダーのメンターリング力育成プログラム (ICTを活用したFD/一般)	小柳 和喜雄(おやなぎ やすお)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	85-92	
101	101 一般社会人を対象とした学校広報に関するオンライン意識調査 (ICTを活用したFD/一般)	豊福 晋平(とよふく じんぺい)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(2)	2009.05	93-100	
102	102 教育の改善とE (特集 教育工学と人材育成)	椎原 正次(しいはら まさつぐ)	日本情報経営学会誌	日本情報経営学会	29(4) (通号 124)	2009.05	40-48	
103	103 科学ミスコミュケーション発生メカニズムの探求 (第54回ヒューマンインタフェース学会研究会 コミュニケーション支援、共生コミュニケーションおよび一般)	三輪 眞木子(みづま きこ); 高橋 秀明(たかはし ひであき)	ヒューマンインタフェース学会研究報告集	ヒューマンインタフェース学会 / ヒューマンインタフェース学会 [編]	11(2)	2009.05.14	39-42	
104	104 科学ミスコミュケーション発生メカニズムの探求 (福祉情報工学)	三輪 眞木子(みづま きこ); 高橋 秀明(たかはし ひであき)	電子情報通信学会技術研究報告	電子情報通信学会	109(29)	2009.05.14	39-42	
105	105 科学ミスコミュケーション発生メカニズムの探求 (ヒューマン情報処理)	三輪 眞木子(みづま きこ); 高橋 秀明(たかはし ひであき)	電子情報通信学会技術研究報告	電子情報通信学会	109(29)	2009.05.14	39-42	
106	106 科学ミスコミュケーション発生メカニズムの探求 (ヒューマンコミュニケーション基礎)	三輪 眞木子(みづま きこ); 高橋 秀明(たかはし ひであき)	電子情報通信学会技術研究報告	電子情報通信学会	109(29)	2009.05.14	39-42	
107	107 授業ビデオクリップによる教育改善法の共有化 (授業研究・教材開発)	山際 和明(やまぎわ かずあき)	大学教育研究年報	新潟大学教育開発研究センター / 新潟大学教育開発研究センター [編]	(14)	2009.06	13-15	

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
108	大学の授業の質向上の観点からのFD活動のあり方論(第2回 堺・南大阪地域学シンポジウム 地域活性化を視野に入れた魅力ある講義のプロデュース—「上方エンタメ」授業の経験を踏まえて)	坂手 恭介	桃山学院大学経済経営論集	桃山学院大学総合研究所 / 桃山学院大学経済経営学会 編	51(1)	2009.06	229-233	
109	看護のFDという視点からの学習支援の必要性(特集 学生支援で学生を変える—取り組みの必要性と効果)	佐藤 禮子(サトウ レイ)	看護教育	医学書院	50(7)(通号 602)	2009.07	574-578	
110	これからの図書館員 情報専門家の目指すべき方向性—経営的俯瞰的能力の涵養が必要	山崎 久道(ヤマザキ ヒサミチ)	情報管理	科学技術振興機構 / 科学技術振興機構 編	52(4)	2009.07	189-197	
111	学士課程教育改革の展望—中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」の背景(特集 学士課程教育と質保証)	久保 公人(クボ キミト)	大学評価研究	大学基準協会 大学評価・研究部 / 大学基準協会 大学評価・研究部 編	(8)	2009.07	9-15	
112	授業観察のための授業映像への書きアノテーション手法の分析(教科教育学と教育学の交差点/一般)	江本 啓訓(エギ ヒロノリ); 寶理 翔太郎(ホウリンショウ タロウ); 加藤 由香里(カトウユカリ) 他	日本教育工学会 報告集	日本教育工学会	09(3)	2009.07.04	155-159	
113	英語ライティング自動採点システムを導入した授業評価(教科教育学と教育学の交差点/一般)	松本 佳穂子(マツモト カホコ)	日本教育工学会 報告集	日本教育工学会	09(3)	2009.07.04	161-164	
114	愛媛大学 学部を横断したFDの構築(特集 FDの推進)		カレッジマネジメント	リクルート / リクルート [編]	27(4)(通号 157)	2009.07-08	10-13	
115	山形大学 ネットワーク化の拠点校(特集 FDの推進)		カレッジマネジメント	リクルート / リクルート [編]	27(4)(通号 157)	2009.07-08	14-17	
116	流通科学大学 全学的一斉授業公開制度を軸にFD活動(特集 FDの推進)		カレッジマネジメント	リクルート / リクルート [編]	27(4)(通号 157)	2009.07-08	18-21	
117	特集 FDの推進		カレッジマネジメント	リクルート / リクルート [編]	27(4)(通号 157)	2009.07-08	4-21	
118	教育力を向上させるFD(特集 FDの推進)	大塚 雄作	カレッジマネジメント	リクルート / リクルート [編]	27(4)(通号 157)	2009.07-08	5-9	
119	STAFF DEVELOPMENT 国立大学財務・経営センター「第2回国立大学法人若手職員勉強会」を振り返る	渡部 秀明(ワタベ ヒデアキ); 二村 肇(ニムラ ハジメ)	大学マネジメント	国立大学マネジメント研究会 / 国立大学マネジメント研究会 編	5(5)(通号 50)	2009.08	11-16	SD

No論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
120 学生支援・職員SD 新入生研修の改善を通じ て一亡き学生の声に応える(特集 失敗を生か す 大学経営)	海津 守(カイズ マモ ル)	大学マネジメント	国立大学マネジメント 研究会 / 国立大学マ ネジメント研究会 編	5(5)(通号 50)	2009.08	6-10	SD
121 ワーキング・グループによる大学図書館職員 研修の企画--「adライブラリー」--大学図書館 効果的広報戦略」を企画・実施して(小特集 自 立的な図書館活動)	石井 百葉(イシイ モモ ハ); 小山 美佳(オヤ マミカ); 小高 栄美 (コタカ エミ) 他	大学図書館研究	学術文献普及会	(86)	2009.08	11-18	SD
122 ESD(持続発展教育)のための池田家文庫絵図 (複製)の活用--池田家文庫こども向け岡山後 楽園発見ワークショップの実践	北條 充敏(ホウジョウ ミツトシ); 久磨 由美 子(クマ ユミコ); 大園 隼彦(オオゾノ ハヤヒ コ) 他	大学図書館研究	学術文献普及会	(86)	2009.08	78-91	
123 東京理科大学におけるICTを活用したFDの展 開(特集 FD(Faculty Development))	満田 節生	理大科学フォーラム	東京理科大学	26(8)(通号 302)	2009.08	16-19	
124 特集 FD(Faculty Development)		理大科学フォーラム	東京理科大学	26(8)(通号 302)	2009.08	2-25	
125 FDとは?--今、問われる授業と卒業生のクオリ ティ(特集 FD(Faculty Development))	小祝 修	理大科学フォーラム	東京理科大学	26(8)(通号 302)	2009.08	4-7	
126 激変の時代におけるFD(1)FDの負のイメージ を克服する	小田 隆治	私学経営	私学経営研究会	(415)	2009.09	19-24	
127 学生とともに進めるFD--第1回学生FDサミット を開催して(特集 学生参加による大学改革)	木野 茂(キノ シゲル)	大学マネジメント	国立大学マネジメント 研究会 / 国立大学マ ネジメント研究会 編	5(6)(通号 51)	2009.09	2-7	
128 「連携・共有・公開」のeラーニングTIESの教 育実践(特集 eラーニングを活用した教育支 援技術の最新動向)	中嶋 航一(ナカジマ コウイチ)	電気学会誌	電気学会	129(9)	2009.09	600-603	
129 初年次教育における教員集団の形成 (ICT活 用の授業研究と教師教育/一般)	村上 正行(ムラカミ マ サユキ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(4)	2009.10.24	53-56	
131 2009年度第1回全学FDシンポジウム 教育プロ ジェクト(2008年度採択分)成果報告会		一橋大学教育研 究開発センター/全学 FDシンポジウム報告 書	一橋大学教育研 究開発センター/一 橋大学教育研究 開発センター 編	(11)	2009.11	1-43	
132 講演 講義=演習=連結型授業の創出--「単位の 実質化」の実質化[含 質疑応答](2009年度第 1回全学FDシンポジウム 教育プロジェクト (2008年度採択分)成果報告会)	佐野 泰雄; 平子 友 長	一橋大学教育研 究開発センター/全学 FDシンポジウム報告 書	一橋大学教育研 究開発センター/一 橋大学教育研究 開発センター 編	(11)	2009.11	17-25[含 抄録]	

130	講演 公共部門のリスク・マネジメントに関する教育プログラムの推進(授業と公開講座)〔含質疑応答〕(2009年度第1回全学FDシンポジウム教育プロジェクト(2008年度採択分)成果報告会)	田近 栄治	一橋大学教育学研究開発センター/全学FDシンポジウム報告書	一橋大学教育学研究開発センター/一橋大学教育学研究開発センター編	(11)	2009.11	26-33[含抄録]	
133	講演 一橋大学における数理情報教育について〔含質疑応答〕(2009年度第1回全学FDシンポジウム教育プロジェクト(2008年度採択分)成果報告会)	藤田 岳彦	一橋大学教育学研究開発センター/全学FDシンポジウム報告書	一橋大学教育学研究開発センター/一橋大学教育学研究開発センター編	(11)	2009.11	2-8[含抄録]	
134	参加者アンケート(2009年度第1回全学FDシンポジウム教育プロジェクト(2008年度採択分)成果報告会)		一橋大学教育学研究開発センター/全学FDシンポジウム報告書	一橋大学教育学研究開発センター/一橋大学教育学研究開発センター編	(11)	2009.11	37-42	
135	講演 市民社会基盤形成のための教育プログラム〔含質疑応答〕(2009年度第1回全学FDシンポジウム教育プロジェクト(2008年度採択分)成果報告会)	林 大樹	一橋大学教育学研究開発センター/全学FDシンポジウム報告書	一橋大学教育学研究開発センター/一橋大学教育学研究開発センター編	(11)	2009.11	9-16[含抄録]	
136	ラウンドテーブル ライティング教育を基点にした学習支援とFD活動の展開	井下 千以子(イノシタチイコ); 近田 政博; 長澤 多代 他	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会編	31(2) (通号 60)	2009.11	100-103	
137	激変の時代におけるFD(2)授業改善ビデオ『あっとおどろく! 大学授業NG集』の制作	小田 隆治	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会編	31(2) (通号 60)	2009.11	11-19	
138	大学教員のライフサイクルと学習共同性への参画(シンポジウム 大学教員の養成・研修-Disciplineとの相剋・相生において)	大塚 雄作(オオツカユウサク)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会編	31(2) (通号 60)	2009.11	34-38	
139	ユニバーサル段階における大学教員の養成・研修システム(シンポジウム 大学教員の養成・研修-Disciplineとの相剋・相生において)	小田 隆治(オダ タカハル)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会編	31(2) (通号 60)	2009.11	39-44	
140	専門職業人としての大学教員とその養成・研修-英国における事例の考察から(シンポジウム 大学教員の養成・研修-Disciplineとの相剋・相生において)	加藤 かおり(カトウ カオリ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会編	31(2) (通号 60)	2009.11	45-49	
141	ラウンドテーブル 大学体育教員の養成と採用FD評価	小林 勝法(コバヤシカツノリ); 松本 秀夫; 吉岡 尚美 他	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会編	31(2) (通号 60)	2009.11	52-55	

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
142	ラウンドテーブル 学生と変える大学教育—FDを楽しむという発想	清水 亮(シミズ リョウ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(2) (通号 60)	2009.11	56-59	
143	ラウンドテーブル FDネットワークの可能性を拓く	夏目 達也(ナツメ タツヤ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(2) (通号 60)	2009.11	67-70	
144	ラウンドテーブル FDプログラムの開発を支援する「新任教員FDのための基準枠組」をツールとして	杉原 真晃(スギハラ マサアキ); 川島 啓二; 加藤 かおり 他	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(2) (通号 60)	2009.11	71-74	
145	ラウンドテーブル TAの業務範囲と研修について	安岡 高志(ヤスオカ タカシ)	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(2) (通号 60)	2009.11	79-81	
146	ラウンドテーブル 学生の多様化に対応する初年次教育システムの構築と実践—全ての学生に教育の質を保証するために	本田 直也(ホンダ ナオヤ); 奥田 雅信; 石毛 弓 他	大学教育学会誌	大学教育学会 / 「大学教育学会誌」編集委員会 編	31(2) (通号 60)	2009.11	92-95	
147	授業計画と実施結果の差異に着目した授業リフレクションの黒板利用型授業に対する実践と効果(教育工学)	三石 大(ミツイシ タカシ); 今野 文子(イミノ フミコ); 菅野 裕佳 他	電子情報通信学会技術研究報告	電子情報通信学会	109(268)	2009.11.06	35-40	
148	アメリカの卒後臨床研修から日本が学ぶべきこと	津田 武(ツダ タケシ)	医療	国立医療学会 / 国立医療学会 [編]	63(12)	2009.12	775-783	
149	Moodleの自由記述から抽出した特徴語の分析に関する研究 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	柏木 肇(カシワギ ハシメ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	101-106	
150	大学教員の自由記述回答からみた授業実施の視点とIT研修による意識の変化 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	清水 康敬(シミズ ヤスタカ); 苑 復 傑	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	107-114	
151	eポートフォリオを活用した高等教育における教育改善・FD活動の事例分析—米国カーネギー教育振興財団における取り組みからの組織化・大学の組織改革/一般	笹尾 真剛; 酒井 博之(サカイ ヒロユキ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	115-120	
152	大学教員のための教育研修支援システム「MOST」の開発—マルチメディアポートフォリオを活用したFD・教育改善に向けて (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	酒井 博之(サカイ ヒロユキ); 田口 真奈(タノチ マナ); 笹尾 真剛 他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	121-124	

No論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
153 本学[松陵大学]におけるICT利用の状況と課題 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	立野 貴之(タチノタカシ); 安達 和年(アダカズトシ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	125-128	
154 携帯電話への情報配信システムK-tai Campus2.0の活用に関する検討 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	葉田 善章(ハダヨシアキ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	129-134	
155 FDの組織化・大学の組織改革/一般		日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	1-298	
156 [創価]女子短期大学におけるCollabTestの活用-理解を深める協調的な英語学習を指して (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	南 紀子(ミナミノリコ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	135-142	
157 科目間のつながりから教員間のつながりをつくる学習支援の検討 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	長谷川 紀幸(ハセガワノリユキ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	1-4	
158 研究室コミュニケーション論の構築に向けて-研究室に関する参加・移動・開発のモデル (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	辻 高明(ツジタカアキ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	143-146	
159 説得段階の学校広報における情報再編集・要約機能 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	豊福 晋平(トヨフクシンペイ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	147-151	
160 教育改善を左右する学内関連組織間の情報流通 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	山地 弘起(ヤマジヒロキ); 岡田 佳子(オカダヨシコ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	15-18	
161 費用対効果を強調することにより耐震補強工事への動機づけを高める教材の開発 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	田部井 航太(タベイコウタ); 松田 稔樹(マツダトシキ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	153-160	
162 中国語授業における字幕付き自己紹介動画作成の試み (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	坪田 康(ツボタヤスシ); 壇上 正剛(ダンシジ マサタケ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	161-168	
163 日本語学習に関する学習者ビリーフの考察-中国の大学生の調査からわかったこと (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	Miki Harris	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	169-173	
164 日本語学習者の発話に対する母語話者の理解 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	鹿内 薫(シカナイカオル)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	175-180	
165 中国人研修生・技能実習生の日本語習得に関する事例研究 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	小松 麻美(コマツアサミ)	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	181-187	

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
166	日本語学習者の学習方略使用を促すエラーニング教材の開発 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	西谷 まり(ニシタニマリ) ; 松田 稔樹(マツダトシキ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	189-196	
167	学生生活支援システムによる教育改善への取り組み (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	山田 親稔(ヤマダチカトシ) ; 野口 健太郎(ノグチケンタロウ) ; 兼城 千波(カネシロチナミ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	19-22	
168	校務支援システム利用における運用要件と教員の負担軽減・校務の効率化に関する検討 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	山本 朋弘(ヤマモトモヒロ) ; 堀田 龍也(ホリタリュウヤ) ; 新地 辰朗(シンチチタツロウ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	197-202	
169	学校CIOの機能検討のためのICT活用リーディング調査(3) (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	波多野 和彦(ハタノカズヒコ) ; 山路 進(ヤマジススム) ; 新地 辰朗(シンチチタツロウ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	203-206	
170	技術科初任教師を対象としたWeb型年間指導計画作成支援システムの開発 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	井戸 康智(イドヤストモ) ; 井ノ上 憲司(イノウエケンジ) ; 今井 亜湖(イマイアコ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	207-214	
171	普通教科「情報」担当教員向け研修教材の開発 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	松田 稔樹(マツダトシキ) ; 石井 奈津子(イシイナツコ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	215-222	
172	「子ども主体の学び合い」を支える教師の働きかけに関するモデルの検討 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	五十嵐 亮(イガラシリオウ) ; 丸野 俊一(マルノシュンイチ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	223-226	
173	問題解決過程におけるメタ認知的知識の分析 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	寺嶋 浩介(テラシマコウスケ) ; 小清水 貴子(コシミズタカコ) ; 藤木 卓(フジキタクシ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	227-230	
174	保育者養成課程における初年次教育に関する研究 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	中村 恵(ナカムラメグミ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	231-234	

No論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
175FDコンテツトによるオンライン授業参観のすすめ (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	新垣 円(アラガキ マドカ); 半田 純子(ハン タジュンコ); 本間 千恵子(ホンマチエコ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	23-26	
176初年次教育授業におけるスチューデントアシスタントの活動評価—今後の活動の検討に向けての成果と課題のまとめ (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	遠海 友紀; 岩崎 千晶(イワサキチアキ); 水越 敏行(ミズコトシユキ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	235-238	
177大学eラーニング課程における基礎学習スキルコンテツトの視聴状況 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	向後 千春(コウゴチ ハル); 石川 奈保子(イシカワ ナオコ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	239-244	
178技術科教員のデジタルコンテツト活用に関する調査 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	鈴木 織江(スズキ オリコ); 今井 亜湖(イマイ アコ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	245-250	
179普通教室における日常的なICT活用を支えるための教室環境の構築および活用の特徴 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	山田 智之(ヤマダ トモユキ); 野中 陽一(ノナカヨウイチ); 石塚 文晴(イシヅカ タケハル) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	251-254	
180CMSとモバイル端末を用いた新しい授業支援システムによる課題習得のための学習場面の検討 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	孕石 敏貴(ハラミイン トシキ); 野村 泰朗(ノムラタイロウ); 林 壮一(ハヤシ ソウイチ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	255-262	
181社会ニーズに即したモデルベース開発の教育システム構築—高専間連携によるモデルベース開発教材の開発 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	水野 正志(ミズノ マサシ); 野口 健太郎(ノグチ ケンタロウ); 山田 親稔(ヤマダ チカトシ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	263-266	
182大学と社会をつなぐ体験学習の教育効果 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	酒井 浩二(サカイ コウジ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	267-274	
183北海道教育大学におけるFDの再構築 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	瀬川 良明(セガワ ヨシアキ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	27-32	
184仮想空間探察と連動したVR教材と携帯情報端末による学習環境の開発と評価 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	藤木 卓(フジキ タカシ); 北原 加保里(キタハラ カホリ); 寺嶋 浩介(テラシマ コウスケ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	275-278	

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
185	原爆を題材としたVR教材を用いた科学技術的 認識育成のための授業実践 (FDの組織化・大 学の組織改革/一般)	北原 加保里(キタハラ カホリ); 藤木 卓(フ ジキ タカシ); 寺嶋 浩介(テラシマ コウス ケ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	279-282	
186	小中学校におけるよりよい問題解決のための 見方考え方としての「計測制御」の指導方法の 検討 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	野村 泰朗(ノムラ タイ ロウ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	283-290	
187	スクラッチによるプログラムを対象とした受講 者のエラー分析 (FDの組織化・大学の組織改 革/一般)	高野 辰之(タカノ タツ ユキ); 宮川 治(ミヤ カワ オサム); 小濱 隆司(コハマ タカシ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	291-294	
188	リアルタイム課題提出システムの開発 (FDの 組織化・大学の組織改革/一般)	長谷川 伸(ハセガワ シン); 松田 承一(マ ツダ ショウイチ); 高 野 辰之(タカノ タツユ キ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	295-298	
189	徳島大学におけるFD実施組織の発達過程に 関する一考察—プログラムの実質化とセン ターの役割に注目して (FDの組織化・大学の 組織改革/一般)	香川 順子(カガワ ジュンコ); 田中 さ か(タナカ サヤカ); 神藤 貴昭(シントウ タ カアキ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	33-38	
190	授業改善コンサルティングに基づく大学授業 支援システムの開発と評価 (FDの組織化・大 学の組織改革/一般)	尾澤 重知(オザワ シ ゲト); 牧野 治敏(マ キノ ハルトシ); 岡田 正彦(オカダ マサヒコ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	39-44	
191	ファカルティ・ディベロップのID的基礎とは何 か (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	鈴木 克明(スズキ カ ツアキ)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	45-48	
192	学部を横断したシラバスのテキストマイニング の試み (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	中狭 知延子(ナカバ サミチエコ); 平田 謙次(ヒラタ ケンジ); 手塚 洋一(テズカ ヒロ カズ) 他	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	49-52	
193	大学教員を対象とした授業改善の現状と課題 に関する調査 (FDの組織化・大学の組織改革 /一般)	山田 政寛(ヤマダ マ サノリ); 末本 哲雄 (スエモト テツオ); 青 野 透(アオノ トオル)	日本教育工学会研究 報告集	日本教育工学会	09(5)	2009.12.19	53-58	

No 論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ	備考
194	物理分野1年生を対象としたカリキュラム・デザイン実験 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	森 朋子(モリトモコ); 雨森 聡(アメノモリサトシ); 山田 剛史(ヤマダ ツヨシ)	日本教育工学会研究 報告集	09(5)	2009.12.19	5-8	
195	ピデオ再生に同期させて行う授業評価システムのための評価項目の検討 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	殿村 貴司(トノムラ タカシ); 古田 壮宏(フルタ タケヒロ); 赤倉 貴子(アカクラ タカコ)	日本教育工学会研究 報告集	09(5)	2009.12.19	59-64	
196	データ・テキストマイニングを活用した授業評価アンケートの分析とフィードバックシステムの開発 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	松河 秀哉(マツカワ ヒロユキ)	日本教育工学会研究 報告集	09(5)	2009.12.19	65-70	
197	教師の指導力向上を旨とした情報モラル指導教材の開発 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	玉田 和恵(タマダ カズエ); 松田 総樹(マツダ トシキ)	日本教育工学会研究 報告集	09(5)	2009.12.19	71-78	
198	ケータイ向け情報モラル教材の利用実態に関する調査 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	石原 一彦(イシハラ カズヒロ); 石塚 文晴(イシヅカ ケハル); 堀田 龍也(ホリタ タツヤ)	日本教育工学会研究 報告集	09(5)	2009.12.19	79-86	
199	クリッカーと動画の同期システムPower Feedback NOTEを使った参加型授業の開発 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	酒井 浩二(サカイ コウジ)	日本教育工学会研究 報告集	09(5)	2009.12.19	87-94	
200	カリキュラム改革に連動した体系的なFD (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	松本 佳穂子(マツモト カホコ)	日本教育工学会研究 報告集	09(5)	2009.12.19	9-14	
201	多肢選択式eテストにおける受験者認証法の検討―選択肢記号の筆記情報に対するDPマッチングの適用 (FDの組織化・大学の組織改革/一般)	米谷 雄介(コメタニ ユウスケ); 松本 守(マツモト マモル); 古田 壮宏(フルタ タケヒロ) 他	日本教育工学会研究 報告集	09(5)	2009.12.19	95-100	

FD・SD 関係文献目録(2009) 2. 単行書

No.	書名	著者名	発行地	発行者	出版社	初版発行年
1	FD他大学訪問調査：『平成20年度FD推進プロジェクト報告書』別冊		奈良	奈良教育大学FD委員会		2009
2	学生と変える大学教育：FDを築くという発想	清水亮, 橋本勝, 松本美奈 編著	京都		ナカニシヤ出版	2009.2
3	大学におけるFDの動向：本学での取り組みを中心に		越谷	文教大学付属教育研究所	文教大学教育研究所	2009.2
4	3学会共催大会発表プログラム発表論文合冊集 第1回		平塚	東海大学情報理工学部	東海大学情報理工学部情報化学科]有賀研究室	2009.3
5	ICT活用教育のFD/SDプログラム：人材育成の一翼を担うICT活用教育の質向上を実現する研修プログラムの開発と普及；平成19年度の文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」；2008年度(平成20年度)成果報告書		東京	青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター	青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター	2009.3
6	ティーチングライフ 第1回		徳島	徳島大学教育委員会・FD専門委員会	徳島大学	2009.3
7	アカデミック・ディベロップメントを超えて：日本・アメリカ・カナダ・イギリス・オーストラリアの国際比較	東北大学高等教育開発推進センター 編	仙台	東北大学高等教育開発推進センター	東北大学出版会	2009.3
8	関西学院大学総合教育研究室高等教育研究15年の軌跡：1992-2007：授業調査・FDからcommunication researchの深化へ		西宮	関西学院大学総合教育研究室	関西学院大学	2009.3
9	教育目標・人材目標を掘り下げる：第3回高等教育開発センター講演会報告書	鈴木敏之, 石井邦雄 [述]	相模原	北里大学高等教育開発センター		2009.3

No	書名	著者名	発行地	発行者	出版社	初版発行年
10	教員養成大学としての教育のあり方：アカルティ・ディベロップメント研究報告書. 10	福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター編	宗像	福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター	福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター	2009.3
11	教養教育授業改善の研究と実践：山形大学教養教育改善充実特別事業報告書. 平成20年度	山形大学教育方法等改善専門部会編	山形		山形大学	2009.3
12	高等教育機関としての「教師教育」の質保証を考える：東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター/教育目標・評価学会共催第9回シンポジウム記録集		小金井	東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター	東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター	2009.3
13	神戸女学院大学自己点検・評価報告書：神戸女学院大学基礎データ2008(平成20)年度「大学評価」申請用大学基準協会による大学評価結果ならびに認証評価結果. 2007年度	神戸女学院大学自己評価委員会・FDセンター編	西宮	神戸女学院大学拡大自己評価委員会・FDセンター	神戸女学院大学拡大自己評価委員会・FDセンター	2009.3
14	大学における「学びの転換」と言語・思考・表現：特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)東北大学国際シンポジウム	東北大学高等教育開発推進センター編	仙台	東北大学高等教育開発推進センター	東北大学出版会	2009.3
15	大学教員教育研修のためのモデル拠点形成：平成20年度採択特別教育研究経費報告書. 2008		京都	京都大学高等教育研究開発推進センター	京都大学高等教育研究開発推進センター	2009.3
16	日本におけるティーチング・ポートフォリオの可能性と課題：ワークショップから得られた知見と展望：評価結果を教育研究の質の改善・向上に結びつける活動に関する調査研究会報告書	評価結果を教育研究の質の改善・向上に結びつける活動に関する調査研究会[編]	小平	大学評価学位授与機構	大学評価学位授与機構	2009.3
17	大学教育を科学する：学生の教育評価の国際比較	山田礼子編著	東京		東信堂	2009.5
18	FD改革下における語学教員への7人の新提案：認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から	森山智浩・高橋紀穂・福森雅史・田保顕・藤原眞名夫・カール・ノーマン・森山オアナ著	東京	ブイーン・ソリューション	星雲社	2009.8

編集後記

2009年度の大学教育開発センターの主な活動は、FD・SD部門が学内シンポジウムを、調査・研究開発部門が公開研究会を、それぞれ2回ずつ、実施したことである。

年報に、これらの活動を記録として残すことにより、あらためて2009年度の大学教育開発センターの活動内容を体系的に振り返ることができたように思う。

まず、学内シンポジウムでは、本学で最もホットな話題である「キャリア教育」と「成績評価」の問題をテーマとして取り上げている。日常の業務や、日常の授業を、こうしたシンポジウムを機会に精査し、教職員がともに議論したことは、まさにボトムアップのFD・SD活動であり、その様子を臨場感を持って、年報でお伝えすることができたのではないかと思う。

また、公開研究会では、国内外の研究者を招き、Instructional Developmentの視点から「名古屋大学におけるティップス開発の経緯」を、Curriculum Developmentの視点から「カナダの大学におけるカリキュラム開発研究」についてご講演いただいたことは、学士課程教育の充実に向けた取り組みの一つとして、さらには今後の調査・研究開発部門の活動に向けても、意味深いものであった。

そして、今回の年報ではFD・SD関連の図書2冊の紹介と、昨年度に引き続き、FD・SD関係の文献目録も収めることができた。

こうした一連の取り組みは、大学教育開発センターの研究員全員が兼任として、献身的に活動することによって支えられ、成り立ってきたものである。私自身、今回、編集に携わり、原稿をお寄せくださった教職員の皆さま、並びにセンター研究員・研究補助員の皆さまから、様々なご支援をいただいたことによって、拙いながら何とか形としてお届けできるところまでできた。

皆さまのご厚意に感謝申し上げるとともに、今後とも引き続きセンターへの忌憚のないご意見、そしてご支援をお願いしたい。

大学教育開発センター 調査・研究開発部門主任代行
井下 千以子

『大学教育開発センター年報 第2号』

2010年3月

発行 桜美林大学 大学教育開発センター
〒194-0294
東京都町田市常盤町 3758 桜美林大学 其中館 1階 101
TEL 042-797-6724
FAX 042-797-6398

印刷 株式会社リョーイン
〒229-1193
神奈川県相模原市田名 3000 番地
TEL 042-761-7012

J. F. Oberlin Faculty Development Center Annual Report



J. F. OBERLIN

桜美林大学 大学教育開発センター